

林谷遺跡

—高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書—

2024年3月

福崎町教育委員会

あいさつ

福岡町は古くから交通の要衝として栄え、周囲を豊かな山林に囲まれ、中央部を清流市川が流れており、その東西それぞれに市街地が形成されてきました。

平成 27 年度から高岡・福田地区は場整備事業に伴い、調査を実施してまいりました。それによって、市川西岸の高岡にも新たな遺跡が確認され、特に奈良時代の集落が多数あることがわかりました。徐々に高岡・福田地区の状況が明らかになってきています。

このたび、平成元・3 年度に実施した林谷遺跡の発掘調査成果をまとめ、報告書を刊行致しました。広くご活用いただき、みなさまにとって郷土の歴史・文化への理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ、多くの方々にご理解とご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

令和 6 年 3 月

福岡町教育委員会
教育長 高橋 渉

例言

1. 本書は高岡・福田地区は場整備事業に伴って調査を実施した兵庫県神崎郡高岡字林ノ谷・社ヶ一に所在する林谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成 29 年度から試掘確認調査を実施し、令和元・3 年度に本発掘調査を行った。調査は兵庫県中播磨県民センターの依頼を受けて福岡町教育委員会が実施した。
3. 経費は試掘確認調査については国庫補助金を充て、本発掘調査は事業主体者が負担し一部国庫補助金を充てた。
4. 本書に使用した方位は基本的に磁北で、標高は福岡町設定の基準点を使用している。
5. 令和元年度の発掘調査は前半を株式会社マツダ建設に、後半を株式会社安西工業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和 3 年度は調査・測量・撮影を株式会社マツダ建設に委託した。
6. 本書に掲載した図のうち遺跡位置図は福岡町発行の都市計画図（1/10,000）を、調査区配置図は福岡町都市計画図（1/1,000）を編集したものである。
7. 執筆編集は樋口・梶・福永・原井川・常陰の協力を得て渡辺が行った。
8. 本報告に係る図面、写真、遺物等は、福岡町教育委員会にて保管している。
9. 調査・整理作業において、多くの方々や機関にご指導・ご助言・ご協力をいただきました。感謝します。地元校区の方々、調査に参加いただいたの方々、工事関係者の皆様には感謝します。

本文目次

I はじめに

- 1 調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・ 1
- 2 分布試掘確認調査の経過と結果・・・・・・・・ 1
- 3 本発掘調査の経過・・・・・・・・・・ 5
- 4 整理作業の経過・・・・・・・・・・ 6
- 5 周辺の環境・・・・・・・・・・ 6

II 調査結果

- 1 調査の概要・・・・・・・・・・ 9
- 2 遺構・・・・・・・・・・ 9

III 出土遺物・・・・・・・・・・ 15

IV おわりに・・・・・・・・・・ 23

図目次

図 1 福崎町・林谷遺跡の位置・・・・・・・・ 2	図 20 5区東半上層平面図・・・・・・・・ 39
図 2 試掘確認調査・本発掘調査位置図・・・・・・・・ 3	図 21 5区東半上層遺構図・・・・・・・・ 40
図 3 試掘確認調査実施図・・・・・・・・ 4	図 22 5区西半暗渠平面図・・・・・・・・ 41
図 4 林谷遺跡の位置と周辺の遺跡・・・・・・・・ 7	図 23 5区東半下層遺構図・・・・・・・・ 42
図 5 落とし穴集成図・・・・・・・・ 24	図 24 5区下層平面図・・・・・・・・ 43
図 6 1区平面図・西壁土層断面図・・・・・・・・ 25	図 25 5区北壁中央・東壁断面図・・・・・・・・ 44
図 7 1区遺構実測図 (SK01-07・SX01-03・SD01)・・・・・・・・ 26	図 26 5区遺構実測図(1)(SH02)・・・・・・・・ 45
図 8 2区平面図・北壁土層断面図・・・・・・・・ 27	図 27 5区遺構実測図(2)(SH04)・・・・・・・・ 46
図 9 2区遺構実測図・・・・・・・・ 28	図 28 5区遺構実測図(3)(SH05)・・・・・・・・ 47
図 10 3区平面図・西壁土層断面図・・・・・・・・ 29	図 29 5区遺構実測図(4)(SH06)・・・・・・・・ 48
図 11 3区遺構実測図(1)・・・・・・・・ 30	図 30 5区遺構実測図(5)・・・・・・・・ 49
図 12 3区遺構実測図(2)・・・・・・・・ 31	図 31 5区遺構実測図(6)(SB07・SB08)・・・・ 50
図 13 4区遺構平面図・・・・・・・・ 32	図 32 5区遺構実測図(7)(SB09・SB11)・・・・ 51
図 14 4区西壁土層断面図・・・・・・・・ 33	図 33 5区遺構実測図(8)(SB10・SB12)・・・・ 52
図 15 4区遺構実測図(1)(SH01)・・・・・・・・ 34	図 34 5区遺構実測図(9)(SX03・SK04)・・・・ 53
図 16 4区遺構実測図(2) (SH01 カマド・土器出土状況)・・・・・・・・ 35	図 35 出土遺物実測図(1)・・・・・・・・ 54
図 17 4区遺構実測図(3)(SB01・SB02)・・・・ 36	図 36 出土遺物実測図(2)・・・・・・・・ 55
図 18 4区遺構実測図(4)(SB03-SB05)・・・・ 37	図 37 出土遺物実測図(3)・・・・・・・・ 56
図 19 4区遺構実測図(5) (SA01-02・SX01-02-SD 01・SK01-03)・・・・ 38	図 38 出土遺物実測図(4)・・・・・・・・ 57
	図 39 出土遺物実測図(5)・・・・・・・・ 58

I はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

福岡町では高岡・福田地区においてほぼ整備事業が計画された。事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である観音堂遺跡・宮ノ前遺跡・前田遺跡・林谷遺跡・狐塚遺跡が存在するが、それ以外の遺跡の存在も想定されたので、計画策定段階から埋蔵文化財取り扱いの協議がなされた。通常の進め方で事業用地内の分布調査を実施し、その結果などから試掘確認調査対象地を確定し試掘確認調査を行い、遺構面が保全されない部分について本発掘調査を実施することとした。

調査はすべて福岡町教育委員会が主体となって行った。進捗実施にあたっては、事業主体である兵庫県中播磨県民センター姫路土地改良センターならびに福岡町農林振興課・土地改良区・地元と協議しながら実施した。調査にあたっては多くの方々の協力を得ました。感謝いたします。

2. 分布試掘確認調査の経過と結果

分布調査は平成27年度から開始したが、当該地域の分布調査は平成29年度2月から5月にかけて行った。福岡町作成の図(1,000分の1)を利用し、筆ごとに採集点数をカウントした。調査では分布調査成果に地形も考慮して、遺跡範囲を囲った。調査は玉田誠司・樋口 碧・渡辺 昇・梶 智美が担当した。分布調査成果をもとに試掘確認調査を行った。平成28・29年度に5期に分けて調査を実施した。当該遺跡部分は北工区を対象とした平成29年度に行った。耕作物の都合で麦作部分は9月に行い、10月に稲作部分を行った。詳細は福岡町文化財調査報告17・21で報告しているので、参照いただきたい。

林谷遺跡周辺部分だけを略記すると、49G～69Gが該当する。9月27日(水)28日(木)10月3日(火)の3日間で試掘確認調査を実施した。南側の尾根下の平地部はNo.56～59でピット・落ち込みなどを検出し明瞭な遺構面を確認した。56Gは耕土・床土・オリーブ褐シルト質極細砂(礫混じりと礫なしがある)・黄褐極細砂(地山)の6層から成り、地山面で遺構を検出している。遺構面はあるものの南側ならびに東側に地形が下がっており、包含層は認められなかった。洪水堆積も認められ、堆積土も厚くなっていた。遺跡範囲は今回調査を行った4・5区南側まで、西側もNo.61では遺構面が確認されておらず、No.59の西部分までが遺跡の範囲と思われる。東側は谷部で遺構面は確認できず、北側も尾根を削って耕作地に広げていることから耕土直下が地山になっており、今回調査を行った範囲から北には広がっていない。

尾根部の調査ではNo.62～66で落ち込み・土坑などの遺構が検出されている。耕土・床土・オリーブ褐シルト質極細砂の下は地山である明黄褐シルト質極細砂になっている。第3層のオリーブ褐シルト質極細砂がない部分もあり、No.66の水田では東側が低くなっている。No.66の北側に設定したNo.67やNo.68では谷地形で深くなっており、地山が確認できなかった。西池を作る前は深い谷になっていたようである。遺跡の広がりには東側ならびに北側は今回調査した地点を限りとし、西側・南側には遺跡が延びていると考えられる。No.64の南側造成時にササカイトの石器などが採集されていることから、今回調査した落とし穴と同時期の縄文時代の遺跡が尾根上に広がっていたと推測される。

林谷遺跡の範囲は北・東と南東半はほぼ限定できるが、西から南西部にかけては明確でない。県道を越えて遺跡が延びているかどうかは不明である。七種川沿いの低い水田になることから、大きくは広がっていないと思われる。

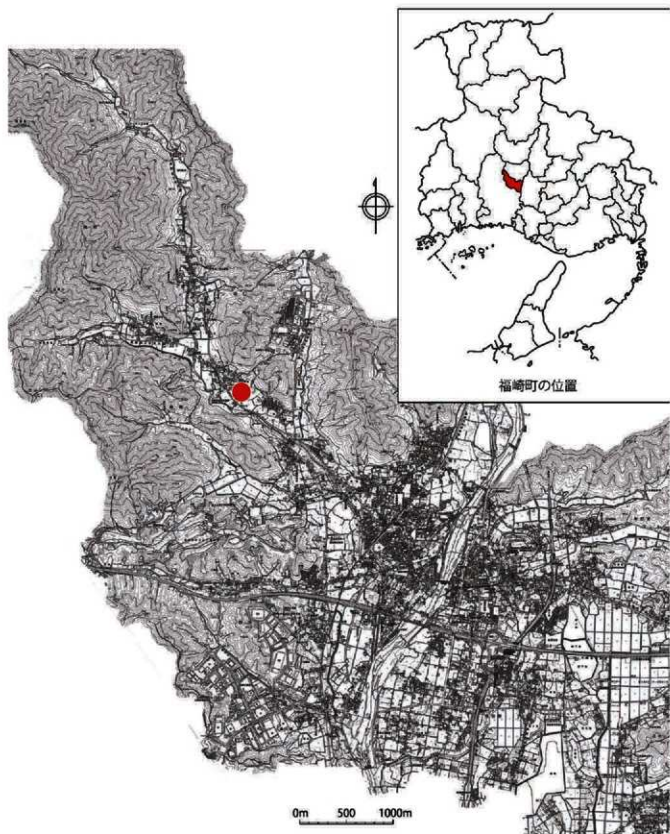
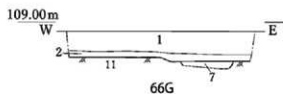
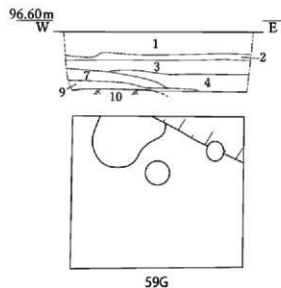
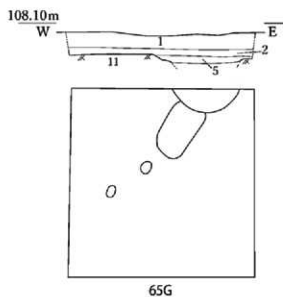
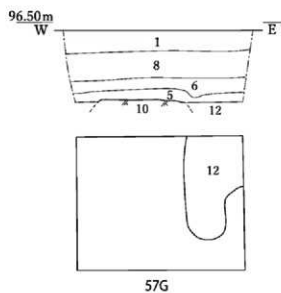
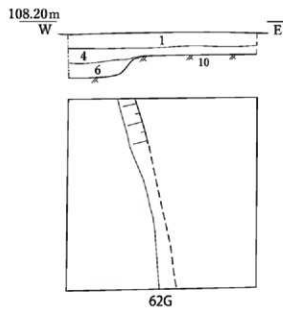
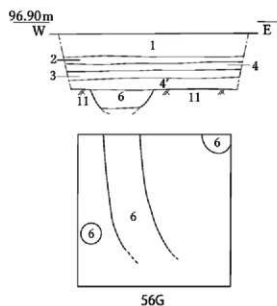


図1 福島市・林谷遺跡の位置



- 1 粘土
- 2 床土
- 3 オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト質極細砂 (小眼層)
- 4 オリーブ褐 (2.5Y4/4) シルト質極細砂
- 4' オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト質極細砂
- 5 暗褐 (7.5YR3/3) 極細砂
- 6 黒褐 (2.5Y3/2) 極細砂
- 7 褐 (10YR4/3) シルト質極細砂
- 8 2・3層が互層し
- 9 暗褐 (10YR4/3) シルト質極細砂
- 10 明黄褐 (10YR6/6) シルト質極細砂—地山
- 11 黄褐 (2.5Y5/6) 極細砂—地山
- 12 黒褐 (2.5Y3/2) 極細砂

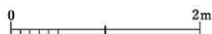


図3 試掘確認調査実測図

平成 29 年度調査体制

調査主体	福島町教育委員会
教 育 長	高寄十郎
社会教育課長	大塚久典
社会教育課副課長	福永知美
社会教育課主事	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子



調査風景

3. 本発掘調査の経過

調査の方法

調査対象地は耕作地で主に水田であるが一部休耕地もあった。試掘確認調査の結果で調査範囲を決め、掘り下げは重機を用い、精査等においては人力により対応した。壁面の図化、写真撮影による記録を適宜行った。令和2年度は次年度も耕作を行うことから、埋戻し作業も行った。

調査経過

試掘確認調査の結果、本調査が必要とされた地点について令和元年度と令和3年度に本発掘調査を実施することとなった。本体工事の進捗に合わせて林谷遺跡の北側部分（1～3区）が急ぐことから、分けて調査を行った。両年度とも兵庫県中播磨県民センターと福島町教育委員会にて委託契約を交わした。令和元年度の発掘調査工事は前期を株式会社マツダ建設に、後期を株式会社安西工業に、ドローン撮影と基準点測量は株式会社ジオテクノ関西に委託した。令和3年度は発掘調査・撮影・測量を株式会社マツダ建設に委託した。

令和元年度の調査は前期と後期に分けて発注した。前期は狐塚遺跡1～3区から着手し、次に林谷遺跡1～3区の調査を行った。令和元年7月1日（月）～11月7日（水）の間で実働36日間を費やして行った。調査面積は2,008㎡である。後期は林谷遺跡4区として552㎡を調査した。ドローンと足場からの全景写真撮影・実測・断割り作業ののち、来季も耕作を行うことから埋戻し作業も行い調査を終了した。

令和3年度の調査は桜遺跡3区、桜東畑遺跡に引き続いて実施した。令和3年7月19日（月）～9月23日（木）の実働36日間を費やして行った。林谷遺跡5区で調査面積は1,540㎡である。令和3年度は本体工事が実施されることから埋戻し作業は行っていない。

令和2・3年度調査体制

調査主体	福島町教育委員会
教 育 長	高橋 涉
社会教育課長	松田清彦
社会教育課副課長	森 公宏
社会教育課係長	藤原 元
社会教育課主査	長谷川幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整 理 作 業 員	梶 智美
整 理 作 業 員	福永明子



調査風景

整理作業員 原井川奈美
整理作業員 常陰ひとみ

4. 整理作業の経過

試掘確認調査・本発掘調査と並行して随時整理作業も実施した。土器洗浄や遺構図の調整などの作業は令和元・3年度に行ったが、それ以降の作業と報告書刊行は令和5年度に実施した。経費は発掘調査と合わせて兵庫県中播磨県民センターと委託契約を交わして実施した。

1次調査・2次調査とともに高岡小学校と地元有志には現地見学会を実施したが、地元中心で開催したことから広く町民の方々に見ていただくことができなかった。1次調査資料については、令和3年1月16日～3月14日に福岡町立神崎郡歴史民俗資料館にて開催された令和2年度企画展「令和元年度埋蔵文化財発掘速報展」で紹介し、遺物・写真パネルを展示し、解説会も行った。2次調査資料も同様に令和4年度福岡町立神崎郡歴史民俗資料館企画展「発掘された福岡2021」で展示解説を行った。



調査風景

令和5年度調査体制

調査主体	福岡町教育委員会
教育長	高橋 渉
社会教育課長	木ノ本 亜佳
社会教育課長補佐	鷲尾 進吾
社会教育課文化財係長	長谷川 幸子
社会教育課主査	樋口 碧
埋蔵文化財専門員	渡辺 昇
整理作業員	梶 智美
整理作業員	福永 明子
整理作業員	原井川 奈美
整理作業員	常陰 ひとみ



展示風景

5. 周辺の環境

林谷遺跡は福岡町高岡字林ノ谷周辺に所在する。福岡町域は市川の両岸に分かれて展開しており、市川の支流が流れ開析された谷を形成している。南側には隔絶はないが、他の3方向は地形的に隔絶しており、旧香寺町など旧神崎郡南半を含んだ地域が盆地となっている。林谷遺跡が存在する市川西岸の高岡は七種川によって開析された谷に位置し、尾根部は地質構造では丹波帯に属している。南側の中国自動車道沿いに断層があり、東西方向の交通路となっている。最大支流の七種川に流れ込む河川に大内川があり、大内川沿いに断層が存在するようである。谷地形は河川によって開析されたもので谷底平野になっており、周辺部は段丘である。林谷遺跡・前田遺跡・雨田遺跡は中位段丘にあたり、桜東畑遺跡などは低位段丘に存在する。

福岡町では旧石器時代からの遺跡・遺物が確認されているが、市川西岸では縄文時代からの遺跡

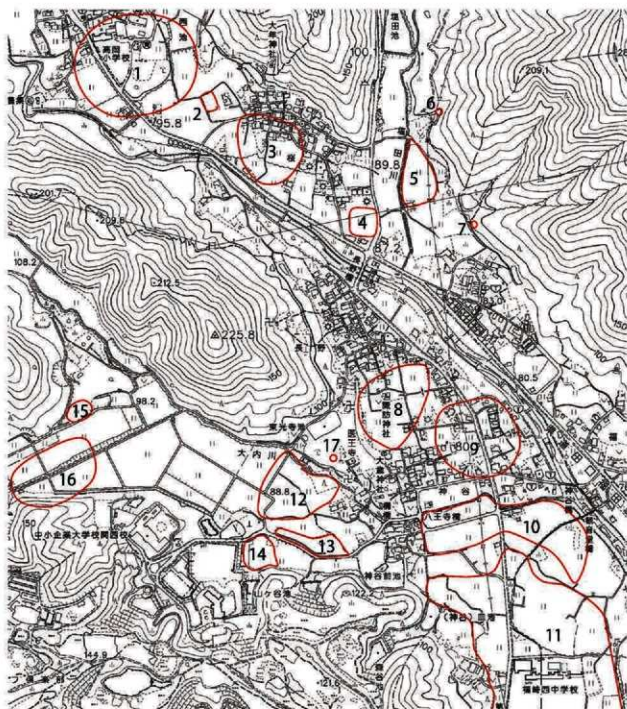


図4 林谷遺跡の位置と周辺の遺跡

- | | | |
|----------|--------------|--------------|
| 1 林谷遺跡 | 2 桜竹之後遺跡 | 3 桜遺跡 |
| 4 桜東畑遺跡 | 5 狐塚遺跡 | 6 塩田山東2号墳 |
| 7 塩田山東古墳 | 8 長野諏訪神社周辺遺跡 | 9 下々通遺跡 |
| 10 観音堂遺跡 | 11 宮ノ前遺跡 | 12 神谷ヤブノハナ遺跡 |
| 13 前田遺跡 | 14 長野多イ谷遺跡 | 15 雨田遺跡 |
| 16 矢口遺跡 | 17 神谷古墳 | |

が知られている。高岡地区では桜の林谷遺跡で、石匙などの石器が採集されていたが、今回報告の調査で落とし穴が検出されている。弥生時代の遺跡も市川西側は明確でない。駅前の中溝遺跡で中期の溝が、山崎の朝谷遺跡で後期の土器棺が出土している。終末期の土器が宮ノ前遺跡・福田東田黒遺跡・西治下代ノ下モ遺跡や福田町田、馬田スガキで採集されている。西治下代ノ下モ遺跡では古墳時代になると集落を形成する。後期に製塩土器を保有している点も注目される。古墳は福岡町



大塚古墳

内で確認されているが、古相の古墳は高橋にある。高橋古墳群で早い段階に鉄剣が出土したことで知られている。箱式石棺を主体部とする6基以上の小円墳で構成される。今のところ福岡で最も古い古墳と考えられている。同種の古墳は東岸の妙徳山遺跡や大善寺裏山古墳の箱式石棺があるが、時期は明確でない。次の時期の古墳は相山古墳であるが、西岸では山崎所在の大塚古墳である。30m前後の円墳で、長さ12mを超す大型の横穴式石室を主体部としている。土器棺を出土した地点の隣接地に朝谷古墳群が築かれる。大塚古墳に続く時期の大型の石室を保有する1号墳（孤塚）が残存している。福田には東大谷古墳・宮山古墳・上垣内古墳・小山古墳の横穴式石室を主体部とする古墳があり、高岡には塩田山東2号墳・塩田山東古墳（桜谷古墳）・五郎が谷古墳が、山崎には馬ウ子古墳群や石棺出土古墳（山崎古墳群とされるが位置不明）、西治には三昧谷古墳群・数可ノ古墳、高橋には佐本古墳が存在する。馬ウ子古墳は谷奥部の漏塞したところに構築されている。山崎古墳群からは高室石で作られた石棺が出土している。それ以外にも複数の古墳があったとされるが、残存せず明確なことはわからない。神谷の医王寺にある神谷古墳がそれに続く7世紀に入る時期の古墳である。石室の高さが低くなり石室長が長くなっている。空間的には狭くなっており、末期の様相を示している。古墳時代の集落跡は前述した西治下代ノ下モ遺跡以外に今回報告する林谷遺跡や観音堂遺跡・宮ノ前遺跡で確認されている。市川東側では加治谷藪下五反畑遺跡をはじめ多く確認されている。

奈良時代の遺構は矢口遺跡の掘立柱建物だけであったが、今回のほ場整備事業に伴う最近の調査によって高岡の各遺跡で調査されている。桜遺跡では近接した2時期の建物が並び、桜東畑遺跡では6棟の建物が検出された。桜東畑遺跡では工房跡と思われる同時期の竪穴建物も調査されている。製塩土器が各遺跡で出土していることが大きな特徴で、桜東畑遺跡では焼塩を行ったかと思われる焼土坑が確認されている。さらに鍛冶遺構も今回の林



桜東畑遺跡 焼塩遺構

谷遺跡や神谷ヤブノハナ遺跡で確認され、鉄づくりも行っていることが判明した。遺物は全遺跡で確認されており、中世の遺物も同様に各地で広範に出土・採集されている。

II 調査結果

1. 調査の概要

調査は北側から1区とし、尾根部を1～3区、山裾部分を4・5区として実施した。工事進捗に合わせて北側から調査を実施し、1～4区を令和元年度に、5区を令和3年度に調査を行った。基本的に1面で行ったが調査区によっては2面の調査を行ったところもある。上面の遺構の大半は鋤溝などの耕作痕であるが5区のように中世の遺構を検出したところもある。

尾根部の調査では落とし穴が多く確認され、縄文時代の遺構群と考えられる。形状は楕円形が多いが円形・隅円長方形・不定形もある。中央に杭跡が確認できた土坑も多くある。上面には鋤溝が一部確認され、近世かと思われる井戸や新しい廃棄土坑も見られた。

山裾の調査区では古墳時代から近世に至る遺構を検出している。円形住居は形状からは古墳時代初頭以前と思われるが、時期を明確に示す遺物が出土していない。飛鳥時代にかけての切りあい関係があることから明確にできなかった。古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴建物と奈良時代の掘立柱建物・鍛冶炉が確認されている。中世に下る掘立柱建物とさらに新しい中世末の門跡、近世以降の耕作痕を調査した。

2. 遺構

1区

遺跡北端に位置する調査区で、面積は550㎡である。遺構残存部（谷部以外）の基本層序は第1層耕土、第2層にぶい黄褐色シルト質極細砂、第3層が地山である黄褐色シルト質極細砂である。第2層は層序としては大きく1層としたが、色調や礫包含の有無などに微妙な変化があり、細分しているところもある。

調査区北東部と西側に旧河道（谷部）が認められ、その間に遺構は残存している。検出した遺構は、溝・落ち込み・土坑・ピット・流路である。遺物は弥生時代後期から近世のものが出土しているが、少量である。西側旧河道（SR01）埋没後に築かれた遺構も3基あり、これらは新しい時期の遺構である。

溝（SD01）は1条検出している。調査区中央北側に位置しており、北東谷部（SR02）に切られており、南側にあるSX03を切っている。幅0.6～1.1mで長さ6.5mを測る。最も深いところで0.6mあるが平均的には0.4m前後である。西側が浅く東側に流れている。断面形状は中央が深いレンズ状を呈している。

落ち込み（SX）は3基調査している。SX01は調査区中央に位置する不定形で大形の落ち込みで最大長5.1mを測る。中央部が最も深い比較的平坦な形状で、中央で0.2mである。埋土は地山の2次堆積土で礫を含んでいる。SX02は南側の旧河道SR01の肩部に位置している。不定形の最大長1.55m、深さ0.3mの落ち込みである。遺物は出土していないが北西肩部から炭が検出されている。SX03は調査区中央にあり、SD01に切られている。検出長4.4mで、それ以上の大きさである。検出幅は1.2mで深さは0.1mと浅い。

土坑は7基検出している。形状は円形・楕円形・不定形と変化がある。SK01は隅円三角形の平面形状で、底面は平坦で炭・焼土がやや多く含まれる。底や肩部に被熱の痕跡は認められない。最大長0.75mで深さ0.1mである。SK02は長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.15mの不定形のプランで断面は半球状で、上面に焼土が存在する。SK03は長さ1.5m、最大幅1.05m、深さ0.1mの中央が窪んだ不定形で逆台形の断面になっており、尾根筋に直交するように築かれている。SK04は長さ1.75m、幅0.7m、深さ0.1mの不定形で浅く底面は平坦である。SK05は長さ1.8mの不定楕

円形の深さ0.1mで西側が深く掘り下げられている。1.2m×0.8mの楕円形で、深さ0.45mを測る。断面形状は逆台形で東側肩部には地山土が崩落しており、埋土はオリブ褐シルト質極細砂である。SK06は長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.15mの楕円形プランで底は平坦である。SK07は東壁沿いで検出し一部調査区外に延びている。長さ1.2m、検出幅0.9m、深さ0.4mの不定円形で断面形状は逆台形である。尾根筋にあることと深さからSK05とともに落とす可能性を考えている。

2区

1区と農道を隔てた南西部に位置する623㎡の調査区である。層序は基本的には1区と同じであるが色調はやや異なっている。谷部分は堆積土が増えている。南西部の広い範囲が谷地地形か旧河道で遺構面は残存しておらず、調査区の東半分に遺構面があり遺構を検出した。土坑・溝・ピットを確認している。

溝(SD01)は1条検出している。調査区中央を北西方向から南東方向へ直線に延びている。SK10で途切れているが29mの長さがあり、西側へ続いており、幅は0.2～0.3mである。旧水田の溝の可能性が高い。

落ち込み(SX01)は調査区北西隅にある最大長1.9mの円形であるが、調査区西側に延びている。深さ0.2mで底は凹凸になっている。南側肩部だけ埋土が異なっている。

土坑(SK)は20基調査した。楕円形のものが多く、長方形・不定形のプランがある。SK02は隅角三角形に近い不定形で南西辺は0.5mあり、最大長は0.8mを測る。残存度は悪く、部分的に残り0.1mと浅い。底は平坦でなく中央が高くなり、底にピットが認められる。径0.1mで深さ0.3mである。杭跡であろう。SK03は楕円形で長径0.95m、短径0.5mで深さは最大で0.1mである。SK04は不定長方形で東西1.2m、南北1.05mを測り、底は平坦で深さ0.3mある。東肩部は地山が崩落したと思われる明黄褐細砂が堆積している。埋土上層にはぶい黄褐シルト質極細砂が、下層には明黄褐シルト質極細砂である。下層からは木片が出土している。底面中央に径0.3m、深さ0.2mの円形ピットが見られた。SK05は長方形プランで長辺1.7m、短辺0.8m、深さ0.1mを測る。SK06は不定形で最大長0.55m、深さ0.2mを測る。SK07はSK06の南西に隣接しており、最大長は0.4mである。SK08は不定長方形で長辺0.9m、短辺は北側が0.5mで膨らんでおり、南側が0.4mである。断面は底が緩やかに弧状を呈している。深さは0.15mと浅く、弧状部分には地山土の2次堆積になり上層は灰黄褐層である。SK09は不定楕円形でSK10を切っている。長径2.3m、短径1.35m、深さ0.25mを測る。SK10はやや歪な長方形プランである。長辺2.0m、短辺1.5m、深さ0.25mで底面は平たく底面中央に最大径0.4m、深さ0.2mのピットを有している。SK11は最大径0.9mの円形を呈し深さ0.6mで断面は半球形で底は丸い。SK12は最大長0.6m、深さ0.15mである。SK13は楕円形プランで長径2.6m、短径1.7mで断面逆台形の深さ0.25mである。SK14は最大長0.6m、短径0.3m、深さ0.15mである。SK15は径0.74mの円形で深さ0.15mである。断面はレンズ状で中央が少し深く堆積している。底には炭層があり、その上に炭・焼土を多く含む褐灰極細砂層が広がり、中央部分のみ地山客土が見られる焼土坑である。床面は強くは焼けていない。SK16は楕円形で長径2.05m、短径1.25m、深さ0.25mを測る。底は平坦で南東隅に最大長0.7mの不定円形の土坑が付設されている。深さ0.15mで底に焼土があり、上に炭層が堆積していた。焼土坑で埋土上層にも炭が混じっていた。SK17は長さ0.5m、幅0.2m、深さ0.15mの長楕円形である。SK18は南北1.1m、東西0.9mの歪な円形で深さ0.45mを測る。断面は逆台形で底は平坦である。SK19は最大長0.4mで深さ0.1mを測る。SK20は最大長0.5mで深さ0.1mを測る不定形である。

3区

2区南側の水田で面積670㎡である。基本層序は耕土・床土の下に褐シルト質細砂、黄褐シルト質細砂、黄褐シルト質極細砂で、すべて堆積層で確実な地山は検出していない。東西に谷地形があり、そこには堆積層が続いているが、中央部分は黄褐シルト質極細砂上面で遺構を検出している。

検出した遺構は土坑・落ち込み・井戸・ビットである。

土坑(SK)は28基確認している。SK01は北壁沿いにあり最大長1.25m、検出幅0.5mで深さ0.15mである。SK02は最大長0.3m、深さ0.15mを測る不定円形である。SK03は長径1.2m、短径1.1m、深さ0.1mで底は平坦である。SK04はSK05に切られており、幅0.95m、検出長1.1m、深さ0.15mを測る。不定長方形で底は丸い。SK05は最大幅1.1mで長さ1.9mの楕円形である。SK06は東壁沿いにあり最大長1.05m、幅0.9mの長方形かと思われる。深さ0.2mで底は平たい。SK07は楕円形で長径1.25m、短径0.7m、深さ0.15mで底は僅かに丸い。SK08も楕円形で長径1.0m、短径0.55m、深さ0.1mで底は平たい。SK09は比較的大形の土坑で、隅円の台形で上辺1.0m、下辺1.6m、高さ2.05mを測る。深さは0.1～0.2mで底は平坦であるが凹凸がある。SK10は楕円形で長径1.05m、短径0.55m、深さ0.1mを測る。SK11は不定形で最大長0.9m、幅0.5m、深さ0.15mを測る。SK12は隅円長方形プランで長辺0.95m、短辺0.7mで深さ0.2mである。断面は丸く中央より南側が深くなっている。中央に径0.25mの円形ビットが見られ、0.2mの深さがある。SK13は不定形で最大長0.8m、幅0.7m、深さ0.15mを測り、底は丸い。SK14は楕円形で長径0.8m、短径0.55m、深さ0.1mで底は丸い。SK15は楕円形で長径1.35m、短径0.55m、深さ0.1mで底は平たい。SK16は2つの土坑が繋がっており、最大長1.0m、幅0.4mを測り、深さは北側が0.15mで底は平たく、南側が0.1mで底は丸い。SK17は隅円方形で1辺0.8m、深さ0.1mで底は平坦である。中央に径0.2mの深さ0.05～0.1mの浅いビットがある。SK18は隅円長方形で長辺0.85m、短辺0.5mで深さ0.1mである。中央やや西よりに径0.2m、深さ0.15mのビットがある。SK19は楕円形で長径1.1m、短径0.7m、深さ0.15mで底は平たい。SK20も楕円形で長径0.95m、短径0.65m、深さ0.35mで断面は逆台形で底は平坦でなく南側が深くなっている。中央やや南に径0.2m、深さ0.15mのビットがある。SK21は卵形の平面形で長径1.2m、短径0.8m、深さ0.4mで断面は逆台形で底は平たい。中央に径0.2m、深さ0.15mのビットがある。SK22は径0.65m、深さ0.1mで中央からやや西側に径0.3m、深さ0.15mのビットがある。SK23は不定楕円形で最大長1.5m、最大幅0.7m、深さ0.3mで断面は逆台形である。SK24は不定円形で径0.85m、深さ0.3mで底は丸くなっている。SK25は楕円形で長径1.0m、短径0.6m、深さ0.35mで断面形状は逆台形であるが、底は丸みを持つ。SK26も楕円形で長径0.7m、短径0.45m、深さ0.35mで底は平たいが北側の方が深くなっている。SK27は東肩部が崩落しており、径0.65m、深さ0.25mで底は丸く中央に径0.2m、深さ0.15mのビットがある。SK28は最大長0.85m、最大幅0.6mの不定方形で深さ0.5mを測る。底は平坦で中央からややずれて径0.15m、深さ0.3mのビットを有する。

落ち込み(SX)は3基ある。SX01は調査区東壁沿いにあり、東側調査区外に延びている。最大長5.7m、最大深さ0.4mで西から東へ低くなっている。谷地形の上端部分の可能性が高い。SX02とSX03は近代の遺構で電柱などが埋められていた。

井戸(SE01)は北西部谷地形の肩部付近で確認された素掘りの井戸で径1.3mの円形であるが正円ではなく一部歪んでいる。深さは2.3mあり、水平堆積をしていた。埋土は還元状態でなかったが、形状から井戸とした。時期も明確ではないが、周辺にSX03などの新しい遺構があり近代以降と思われる。

4区

丘陵下の平地部分の東側調査区である。調査面積は552㎡である。基本層序は第1層耕土、第2層床土、第3層暗褐色極細砂、第4層褐色極細砂、第5層が地山であるにぶい黄褐色シルト質極細砂である。

検出した遺構は竪穴住居・掘立柱建物・柵・土坑・落ち込み・溝である。

竪穴住居(SH01)は調査区中央南寄りで検出している方形住居である。北東部をSX01に、北西部をSK03に切られている。逆に南東部に延びるSX02を切っている。南西辺3.1m、北西辺3.6m、北東辺は残存部3.0mで復元すると3.5mで、南東辺は推定で3.1mを測り、最大の深さは0.25mである。南東辺は切られていることから明確ではないが緩やかに弧を描いているように思われる。他の3辺は直線に近い。床面には10基のピットがあるが、後世の柱穴も含まれている可能性が高い。SX01内のピットもどちらの時期に入るか断定しにくい。埋土の僅かな差からSH01に帰属すると考えている。4本柱の上屋構造と思われる。東の柱穴が最も大きく径0.3m、深さ0.3mを測る。中央付近だけ南北に深く掘られている。他の柱穴は0.2m未満で深さ0.3mである。柱間の心々間距離は同一ではなく差異がある。南西辺は3.2m、北西辺は3.0m、北東辺は2.8m、南東辺は2.9mと方形でなく歪になっている。平面形態は南東柱穴だけ楕円形になり最大長0.6mで南側に大きく歪んでいる。他は径0.3mを測る円形で、深さは0.2m前後である。ほぼ中央にもピットがあり、最大長0.6mを測る歪な隅円方形の平面プランを持ち、深さ0.25mを測る。北西辺中央に竈が築かれている。壁より北側に0.4m張り出した最大幅1.3m、長さ1.8mを測る。壁と礎下との高低差は0.3mである。平面形は外側が広いイチジク形で、北西辺上内側に長さ0.5m、厚さ0.2mの礎を据え、その内側に長さ0.8m、幅0.6m、深さ0.15mの楕円形の土坑を掘り下げる。その土坑から南は1段高くなり0.1mの深さの掘り込みが0.3m延びる。この部分には深く下げられた土坑中層の焼土・炭混じりの暗赤褐色層が延びていることから、焼成後に掻き出した層であろう。暗赤褐色層の上には焼土層があり、北側礎下部分だけ炭が堆積している。礎は強く被熱しており、礎の下からは土師器破片が出土している。

掘立柱建物(SB)は5棟確認した。SB01は調査区北側で検出した2間×2間の側柱建物である。主軸方向はN30°Wである。SB02は調査区東側で検出した側柱建物で東側調査区外へ延びている。南北2間であるが1間が3mと柱間が広い。東西は1間しか調査しておらず、2.8mを測る。主軸方向はほぼ南北を向いている。SB03は調査区中央で確認し、SH01を切り北側の一部と空間を共有している。南北2間、東西3間の側柱建物である。主軸方向はSB02と同じくほぼ南北を向いている。柱穴は最大0.4mで柱痕跡は0.2m前後であるが、大きな柱痕跡は0.25mを測る。深さも南西隅の柱穴で0.5mになる。SB04とSB05は調査区南西に位置し、切り合い関係のある住居である。SB04は南北3間で東西3間以上の側柱建物で主軸方向はN26°Wである。SB05は南北3間で東西4間以上の側柱建物で主軸方向はN35°Wである。前後関係は主軸方向からSB04の方が古いかもしれないが確実ではない。柱穴の切り合いや建て替えは認められない。

落ち込み(SX)は2基調査している。SX01は調査区中央にあり、SH01を切っている。南西コーナーはSK04に切られている。南北4.34m、東西3.66mの長方形プランで、底面は平坦で深さ0.2mでピットなどの付属施設は確認されなかった。ピットを検出しているが、SB03の柱穴で、他のピットもSX01に伴う遺構とは断定できない。底面の一部に薄く暗褐色層が認められるが、埋土は褐色極細砂で一気に埋まっている。先代の遺物もやや多めに混じるが出土遺物から鎌倉時代の遺構と思われる。SX02は調査区中央西側に位置しており、SH01に切られた遺構である。SH01深度より深いことから床面に遺構が残っており、全体のプランは確認できる。不定形の楕円形プランをしており、最大長5.7mで最大幅3.3mを測る。

土坑(SK)は4基確認している。SK01は北東部分に位置しSB01に切られている。最大長0.9

mの楕円形で深さ0.15 mを測る。SK02は北壁沿いにある不定形の土坑で調査区北側に延びている。最大幅2.65 mで検出長3.0 mである。深さは最大0.3 mで西側の方が深くなっており、底は平坦でなく凹凸がある。埋土に礫が入っている。SK03はSH01北西隅を切っている南北に長い長方形の土坑である。幅1.1 m、長さ2.35 m、深さ0.15 mを測る。SK04はSX01南西コーナー部に位置する楕円形の土坑で、SX01を切っており、切り合い関係から最も新しい遺構である。長径2.05 m、短径1.1 m、深さ0.2 mを測る。

溝は1条検出している。SD01で弧状を呈しており、SX01に切られている。幅0.25～0.3 mで、長さ0.8 mを測る。壁溝の可能性も残るが断定できない。

5区

遺構面は2面あり、東半のみ上下2面の調査を行った。検出した遺構は、竪穴建物・掘立柱建物・柵・落ち込み・溝・土坑・ピット・旧河道・耕作痕である。遺物は弥生時代中期から近世のものが出土しているが、大半は奈良時代の遺物である。

層序は耕土・床土の下に、にぶい黄褐シルト質中砂、黄褐シルト質中砂、黒褐シルト質中砂が堆積し、地山である黄褐シルト質細砂になっている。地山上の黒褐層は弥生時代～古墳時代の包含層である。東半上面の遺構は第3層上面で確認し、それ以外はすべて地山面で検出した。北側から南東部分には床土の下に黒褐円礫層が存在する。ある時期の七種川の洪水堆積層である。

〈上層の遺構〉

調査区東半のみで調査した。掘立柱建物・柵・ピット・旧河道・焼土坑・耕作痕を検出した。遺構番号は第1次調査の4区から続いている。上層の面積は960 m²である。耕作痕は全体に及んでいるが、北側で明瞭に検出した。東西方向を基本とするが、一部斜め方向の鋤溝も見られた。面的に調査していないが、西半調査区南側でも鋤溝を検出している。

掘立柱建物(SB06)は東半中央で検出した。北東部分は旧河道で削平されたか検出されなかった。東西2間、南北3間の側柱建物である。東西4.8m南北6.0mを測る。主軸方向はN4° Wとほぼ南北を向いている。

柵(SA03)は大形のピット2基が2.8mの間を取って東西方向に並んでいる。径0.8mと大きく深さも0.6mと深く底面に礎板となる石材を敷いている。重量感のある柱が載っていたと思われ、2基のピットの延長上や直交方向に同様のピットが確認されていないことから、掘立柱建物とは思われないので柵としたが、礎板の石材があり上屋構造に重量感があることを考慮すると門かと思われる。主軸方向はSB06と同じN4° Wである。

旧河道(SR01)は調査区東半中央を南北に流れている。北側は狭く南側は幅を広げている。中央付近から屈曲し幅を広げており、部分的に分流した細い流れも生じている。旧河道には前代の遺物も包含している。南端近くでは弥生中期の赤色顔料が塗布された台付壺も出土している。

焼土坑は北壁で検出した。最大幅1.6 mで深さ0.3 mを測る。坑内には炭が充満している。遺物は出土していない。他にも調査区南東部と中央部で焼土を検出している。焼土だけで土坑など遺構は確認していない。南東部のものは隣接して炭も認められた。焼土は厚さ0.12mあり、最大幅は0.65 mを測る。

旧河道後に全体に耕作地になったようで、東西方向の鋤溝が見られた。特に地形の高い北側は明瞭に検出できたが全体に及んでいる。他にピットと溝を確認しているが、溝は旧河道が分流したものである。ピットは性格不明である。

〈下層の遺構〉

竪穴建物(SH)は5棟確認した。SH02は北東隅で検出し、旧河道によって削平されている。

壁溝とピットが残っている程度で残存状態は悪い。特に南西部と北東部は旧河道で削平され残存していない。1辺6mの方形プランで支柱穴は4本柱である。SH03も旧河道で大きく削平され、壁溝の一部しか残っていない。1辺3.5mと小型の住居である。SH04～06は調査区北西部で検出した切り合い関係のある建物である。SH06が古く、他の2棟に切られている。SH04は短辺4.1m、長辺5.7mを測る長方形プランである。西壁沿いのみ壁溝が存在する。北壁中央に炉があり、4本柱と思われる。中央西寄りに大形の焼土坑がある。東西1.8m、南北1.3mの楕円形で中央部分に亀甲状を呈し強く被熱した厚い焼土層が認められる。SH05は東西6.5m、南北6.3mの正方形に近いプランである。深さは最大で0.2mしか残っていない。炭化材を検出しており、焼失住居である。SH06はやや歪であるが径9mの大形円形建物である。最大の深さ0.1mと残存状態は悪い。支柱穴は明確でないが、中央部分にピットが認められないことから弧状に8本あったのではないかと思われる。北側に方形の張り出しがある。壁溝は1周回っていないが、南側の一部のみ確認された。中央北西部に焼土坑があり、不定形で最大長3.2mを測る。全体に焼けているが、2基の箱型炉が築かれている。小鍛冶炉と思われる。

掘立柱建物(SB)は7棟調査した。SB07は調査区北東部で検出した2間×3間の総柱建物である。主軸方向はN5°Eで、東西4.2m、南北3.8mを測る。総柱であるが、中央の2本は細めである。大きな建替えはないが柱痕跡が2か所ある柱穴が1基あるので小規模な建替え(修理)があったようである。SB08・09は中央南側で確認した。SB08は東側が旧河道によってか、元の水田の境に位置していることから東側水田面の際に削平されたか、東側が残存していない。主軸方向はN25°Eで他建物とは異なっている。側柱建物で、検出した規模は東西2.4m、南北4.8mを測る。SB09はSB08の西側にあるN24°Wの主軸方向を持つ側柱建物である。2間×2間で東西4.0m、南北3.8mを測る。

SB10は主軸方向がN30°Wの側柱建物で大形である。南北4間で9.6m、東西3間7.2mである。SB11はSB10の西側にあり、主軸方向もN24°Wであることから同時期と思われる。南北5.4mの3間、東西6mを測る2間の側柱建物である。SB12は調査区北側に延びている東西3間の東西棟と思われる側柱建物である。北側は山裾に旧河道があり削平されている可能性が高く、山裾までの距離が迫っていることから、南北2間でであろうと思われる。残存長は1間2.2mである。東西梁行は6.6mを測る。主軸方向はN24°WでSB09と同じ主軸を持つ。SB13は調査区中央近くで確認された東西2間×南北3間の側柱建物である。東西3.4m、南北6.4mで主軸はN4°Wである。

旧河道(SR)は調査区東半中央を南北に流れている。上層で確認した旧河道と同一で下層で新たに検出した河道もある。平面的に別なのでSR02～04としたが、SR01中層の一部を含めて同時期の旧河道と思われる。SR01下層は古墳時代以前で、中層は奈良時代、上層は奈良時代以降であろう。中層だけは時期幅があり、掘立柱建物の前後に流路が存在していた。

落ち込み(SX03)は調査区中央でSB10の南西部に位置する。最大幅1.7mで長さ5.5mを測る溝状の落ち込みである。深さは0.15mと浅い。

土坑(SK04)はSX03の延長上にある最大長1.3mの不定形の土坑である。遺物も出土せず、性格は不明である。

鍛冶炉(SU)はSH06の床面で検出したが、後世の遺構と考えている。調査時は竪穴建物に伴う遺構と考えて南炉と北炉としたが、遺構の形状やその後の観音堂遺跡の炉跡の例などから奈良時代の遺構と考えている。竪穴建物の堆積土がほとんどなく切り合い関係は明らかにできないものの、住居・鍛冶炉という遺構の性格から判断した。

鋤溝を南西部で検出したが、下層面で検出したが上層の遺構である。主軸方向も東半上層と同じく東西方向の鋤溝である。

Ⅲ 出土遺物

出土遺物はコンテナ14箱と多くはない。SH01からまとまって出土した以外の遺物量は少なめである。土器が大半で、石器・金属器が1点ずつ出土している。土器は須恵器・土師器・陶器で製塩土器も出土している。

SH01 出土土器（1～29）

1～10は須恵器で、1は杯蓋で天井部は丸く体部は内湾する。端部は生乾き時に触ったのか波状で歪になっている。自然軸付着。2～8は杯身で、2～5には立ち上がりがある。2は自然軸がかかり胎土に小石粒を含んでいる。受部は内湾し、立ち上がりは内傾きみだが僅かに外反する。ツツガ強くやや歪である。3は底面が平たく末調整である。重ね焼き痕が認められる。立ち上がりは低く外反する。受部は短く外傾し端部丸い。4は緑色の自然軸がかかっており、立ち上がりは外反する。底面にはヘラ記号（一）が認められる。5は焼成が甘く、2次焼成を受けている。受部外面に煤が付着している。立ち上がりは短く外反し端部丸く尖る。6は立ち上がりがない杯Gである。不安定な平底から体部内湾し端部は直立気味に尖る。変化点に甘い稜を有し端部は薄い。逆に底部の器壁は厚い。7は内湾する体部で口縁部は残存していない。口径の大きさからは立ち上りのある杯Hと思われる。外面に自然軸が付着している。8は杯部の高さが低く口径が大きいことから高杯の可能性がある。内湾し端部丸い。9は壺で口縁部は外傾し端部丸い。肩部は丸く体部は内湾する。内面はツツガで粘土紐の継ぎ目を残す。器壁は厚く石粒を少量含む。10はやや大きめの口縁部である。口縁部は外傾し端部外に開き角張る。器台か皿かと思われる。

11～29は土師器で、11～14は高杯である。11は杯部筒部上部のみ僅かに残っている。中空の筒部でエド成形によって杯部と接合している。杯部は浅く端部は丸く納める。外面は2次焼成を受けている。12も内湾する杯部で端部は尖り気味である。器表は剥離しており、小石粒を含んでいる。筒部の接合は11と同じ技法でエド痕が顕著に残っている。13も同様の技法で接合したと思われるが、杯部底面に刺突痕が見られる。形態も内湾する杯体部で砂粒含むなど共通している。14は一部を欠くが完形に近い。杯部は内湾し端部丸い。筒部は裾広がりになり接合部が細くなり、内面に紋目が見られる。裾部は水平に近く端部丸く納める。筒部と杯部との接合部は指圧痕が多く見られ、砂粒多く含む。15は内湾する体部で端部内傾し尖る鉢である。下膨れで外面に黒斑が認められる。粘土紐の継ぎ目があり、小石粒多く含む。2次焼成を受けている。16は把手付きの内湾する体部で丸底である。口縁部は内湾し端部尖る。把手は断面円形で先端を欠いているが先が湾曲して尖るタイプであろう。17～23は壺である。17は小形で内湾する球形の体部で短く内湾する口縁部である。外面は縦方向のツツガ整形で内面はエド成形である。口縁部内面はツツガ整形ののちツツガ仕上げである。2次焼成を受けている。18は最大腹径が下にある内湾する体部で口縁部は外傾し端部丸い。粘土紐の継ぎ目明瞭に残り、内面はエド成形からツツガ調整で、外面はツツガ整形である。19は内湾きみで端部尖る。丁寧なツツガで外面は細かいツツガ整形で口縁部はツツガ仕上げである。20は外傾する口縁部で端部角張りきみで強いツツガである。21は内湾する口縁部で中央部分が厚くなっている。強いツツガで外面に凹凸が認められる。端部は内側に尖らせた端面になっている。22は強く被熱した内湾する体部から外反する口縁部になる。口縁部はツツガで端部は丸い。体部外面は縦方向のツツガ整形である。23は緩やかに内湾する体部でエド成形ののち外面は縦方向のツツガ整形で、内面は横方向のツツガ整形を施す。口縁部は外傾し端部丸くツツガで仕上げる。24～28は壺である。24は内湾する口縁部で端部角張る。エド成形ののちツツガ仕上げで、砂粒多く含む。口縁部下面が強いツツガによって浅く凹んでいる。25は僅かに内湾する体部でエド成形ののち内面はツツガリ、外面はツツガ整形である。端部は丸く砂粒を多く含む。26は底部で内湾し端部丸い。エド成形の

ち内面はヘラズリ、外面はㄨ整形である。27は器高の低い甗で1対の把手を有する。器高中央に平面形は三角で外反し端部が尖る把手がある。底面は平坦と思われ、端部は丸く確認されるが蒸気孔の形状は不明である。ㄨ成形のち外面は縦方向のㄨ整形、内面はヘラズリが施される。口縁端部は角張り、端部周辺もㄨで仕上げられる。28は把手部でㄨ成形によって体部に付け斜め不定方向のㄨ整形を加える。把手自体もㄨ成形で平面は三角で外反する。28もやや長めである。29は甗で接合部はないが、大形で口径21cm、裾部径39.4cm、器高35.3cmに復元される。径の割に比較的器高のある製品である。裾端部は角張り、口縁は丸く、体部は内湾し粘土紐が明確である。特に内面は顕著である。口縁から10cm下に断面台形の突帯が付加されている。底は残存していないが、端部に底下端を貼り付けた状態が見られ一般的な底が存在していたと思われる。外面は縦方向のㄨ整形で上部は不定方向に整形を繰り返している。内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭である。

SH02 出土土器 (30)

土師器甕口縁部で端部丸い。ㄨ仕上げで、外面は強く施されたことにより器表に凹凸がある。磨滅顕著である。

SH04 出土土器 (32～42)

32～39は須恵器である。32～35は杯身で、32の底部は不安定な平底で体部にかけて内湾する。ㄨで底面は未調整である。立ち上がりは短めで外反し端部尖る。受部は内湾ぎみに上方へ延びる。33は立ち上がりのない内湾する体部で端部丸い。歪んでおり、外面火燗状になっている。34は体部途中で僅かに屈曲し変化する。ㄨで端部丸い。35は僅かに内湾する底部で体部は外傾する。口縁部は残っていないが、立ち上がりの残る杯Hと思われる。36は杯蓋で天井部平坦で口縁部外傾し端部丸い。37は杯身で高台を有する杯Bである。低い端部が内外に肥厚する断面台形の高台で、底面は平たく、体部内湾する。38は丸底の甗底部で、外面は全体に自然釉が付着している。小石粒も多く付いている。39は平甗で口縁部を欠いている。肩部は丸くなり稜線は持たない。底部は下膨れの丸底で器壁厚めである。

40～42は土師器である。40は内湾する甕口縁部で端部内側に尖らせている。内面は細かいㄨ整形で強く焼けている。くの字口縁であるが内外ともに明瞭な稜線は持たない。41は磨滅著しい内湾する口縁部で端部丸い。プロポーシオンから器台の上台と思われる。2次焼成を受けている。42は脚台部で製塩土器であろう。脚台Ⅲ式で内湾する脚台で中実になっている。

SH05 出土土器 (43)

土師器甕口縁部で僅かに外反し端部角張り、1条の沈線を有する。内面は粗いㄨ整形からㄨ仕上げである。頸部外面はㄨ成形の痕跡が残る。

SH06 出土土器 (31・44～47)

31は須恵器杯身で内湾する体部から口縁部である。底は僅かしか残っていないが、平底に近いと思われる。重ね焼きの痕跡が残っている。

44・45は須恵器で、44の器種は不明だが蓋と思われる。径3cmの大きなつまみで、上面は平坦である。天井部は内湾し段状の変化点を持って口縁部に延びている。ㄨである。45は杯で内湾する体部から口縁部で端部尖る。重ね焼きの痕跡残りシャープなつくりである。46・47は製塩土器で、口縁端部を丸く仕上げている。ㄨ成形で一部ㄨ調整を加える。小石粒や砂粒多く含み、器表の剥離が見られる。口縁端部は肥厚し、体部は内湾する。46の口縁部の形状は内傾するが、47は直立ぎみで上方に延びる。

SB 出土土器 (48～53)

48はSB01出土の大きめの土師器皿で不安定な平底で内湾し端部丸い。ㄨ成形のち口縁部はㄨで仕上げられる。49はSB02出土の須恵器杯Aである。平底から体部は内湾し端部反り気味で

丸く納める。重ね焼きの痕跡が認められる。50はSB05出土の管状土錘で半分程度残存している。中央部の幅が広く端部が細くなるもので黒斑が見られる。51はSB07出土の須恵器杯A底部である。コナゲで底部未調整である。平底から外傾する体部になる。52はSB10出土の須恵器杯Bで、器壁の色調は赤褐色で器表とは異なっている。高台は断面方形で外側に開いている。底面は平たく体部は外傾し端部尖り気味である。砂粒が比較的多く含まれる。53はSB11出土の土師器杯もしくは椀底部で磨滅著しいが回転台土師器と思われる。平底から内湾する体部で、2次焼成を受けている。

SA01 出土土器 (54)

土師器甕口縁部で磨滅している。くの字口縁で頸部後縁は甘い。端部は角張り、端面に1条の凹線を有する。外面はタナ成りからナゲ調整である。

ピット出土土器 (55～68)

掘立柱建物に復元できなかったピットから出土した遺物である。55・56はP7出土の土師器皿でエビ成形である。55はコナゲ仕上げで、56はナゲ調整である。56は大形で2次焼成を受けている。57は須恵器椀口縁部で重ね焼きの痕跡が残っている。内面には須恵器片が粘土塊が付着しており、有機質も付着している。内湾し端部肥厚し角張っている。58は製塩土器で外傾し端部丸く、端部下が厚くなっている。エビ成形で小石粒多く含んでいる。59～61は須恵器椀でベタ高台の糸切り底である。59はコナゲ強く器表の凹凸が顕著である。体部内湾し口縁端部は丸く、重ね焼きの痕跡が残る。60のベタ高台は少し高く体部内湾する。61は重心が低く下膨れの内湾する体部である。62は須恵器杯蓋天井部で口縁部を欠く。天井部はコナゲを施しており、平坦すぎることから皿などの底部の可能性もある。63は須恵器杯Aで平底から体部は外傾する。重ね焼きの痕跡が残る。64は土師器杯身で平底から体部は外傾し口縁部は僅かに反って丸く納める。エビ成形からナゲ・コナゲ仕上げである。65は体部の破片であるが、稜線を有していることから須恵器椀と思われる。胎土は特に精良というわけではない。66は土師器椀底部で低いベタ高台である。赤色顔料を塗布している。67は小形の須恵器杯身で、内湾する体部で端部外側に尖らせている。68も須恵器杯身口縁部で端部丸く、重ね焼きの痕跡が残る。

SX01 出土土器 (69～81)

69～71は須恵器で、69は古墳時代の高杯杯部である。外傾し端部は丸く、2条の凹線を持っている。自然軸が付着している。70は強いコナゲで外面に凹凸ができている椀である。外傾し端部近く肥厚し端部丸く、重ね焼きの痕跡が見られる。71は捏鉢で内湾する体部から口縁部上方へつまみ上げている。魚住焼で重ね焼きの痕跡が残る。14世紀で器高が低いことから後半と思われる。

72～78は土師器で、72は小皿である。エビ成形からナゲ調整している。73は甕口縁部と思われ、直立ぎみである。端部は角張り、内面は少し凹んでいる。粘土紐の継ぎ目が見られ、外面は縦方向のウツ整形である。内面の器表が剥離しているが、ウツ整形かと思われる。74～78は甕で、74・75は、くの字口縁で口縁部外傾し端部角張る。砂粒多く含み表面磨滅している。内外面ともにウツ整形と思われるが剥離のため明らかではない。76～78は中世に下るもので、口縁端部が肥厚している。砂粒多く含み口縁部はコナゲである。77は体部外面平行タナ成り形で煤付着しており、鍋の方が良いかもしれない。

79～81は陶器で、79は備前焼甕口縁部で端部折り曲げて肥厚し、コナゲである。80も折り曲げて端部肥厚させる無軸陶器である。81は輪高台付きの底部で内湾する甕である。高台は外側に開き端部尖る。石粒多く見られ、作りも丁寧とは言えない。

SK01 出土遺物 (82～86, S1)

82～84は土師器小皿である。エビ成形からナゲ調整を加えている。83は体部が屈曲するての字

口縁の皿である。84も体部中央で変化するが稜線を持たず、端部肥厚し丸い。85・86は須恵器捏鉢で、85は口縁部で端部内側につまみ上げて端面になっている。重ね焼きの痕跡が見られ、焼成甘く生焼けである。体部は僅かに外反する。残存部端が僅かに変化しているので片口付近の口縁部と思われる。86は底部で不安定な平底で体部内湾する。S1は砥石で裏面は台との接合面の滑り止めとなる刻みが施されている。粘板岩で斜め方向にも擦り目が見られる。薄くなっており、長期間使用されたものであろう。

SR01 出土土器 (87・88)

87は弥生後期初頭の甕口縁部である。外反し端部肥厚する。端面に3条の凹線が施される。コナデで頸部は明瞭な稜線を持たない。砂粒多く含む。88は奈良時代の須恵器杯Aで、平底で体部内湾ぎみに延びる。外面は火禿が見られる。

SR02 出土土器 (89～91)

89は奈良時代の須恵器杯A底部で不安定な平底である。外傾する体部から口縁部は反りぎみに尖る。重ね焼きの痕跡と火禿が見られる。90は須恵器椀口縁部で内湾し端部丸い。コナデで砂粒含む。91は高台を有する椀で、体部内湾し口縁部は僅かに外反し端部下はコナデによって凹んでいる。輪高台は外側に開き端部丸い。内面は堆積時の有機質が付着している。

SR03 出土土器 (92～105)

92は弥生土器無頸壺で高杯同様の筒部が付加されるもので裾部は残存していない。筒部は本体に付けており中空で直線的に延びる。口縁部は水平に折り曲げて形成し、端部は角張り1条の凹線が見られる。体部は直線的に外へ広がりが接合面でもある明瞭な稜線を持って内湾気味の体部下半に続く。93～95は土師器杯で赤色顔料を塗布している。93は内湾する体部で端部は外側に反っている。砂粒含む他の2点に比べて胎土は粗い。94は内湾ぎみで端部丸い。95は未調整の平底から内湾する体部に続く。96・97は須恵器杯Aで平底から体部は外傾する。底部と体部の稜線は甘く、色調が異なる。96は濃い目の灰色で稜線の一部へラズリを施す。97は灰黄色である。98・99は須恵器蓋で98は屈曲する口縁部で端部肥厚する。99は天井部平坦で内湾する。100は須恵器杯Bで平底から体部との明瞭な稜線を有さずに外傾する体部になり、口縁部は外反し端部丸い。高台は外へ開き、端部両側に肥厚し中央が凹線状に凹んでいる。外面に淡い釉がかかっており、高台部にも付着している。101は須恵器杯Bで外に開く断面方形の高台が付く。102は土師器杯底部で平底から外反する体部に続く。器壁は薄く、ミガキが見られる。103・104は製塩土器でコナデ成形からコナデ調整している。磨滅顕著である。105は土師器甕でくの字口縁である。頸部外面に明瞭な稜線を有さない。外面にはコナデ成形が残り、体部には縦方向のウツ整形が施される。口縁端部は上方へつまみ上げて端面になっている。

包含層出土遺物 (106～127、F1、S2)

106～111は奈良時代の須恵器である。106は蓋で天井部は内湾し端部は下方につまみ上げている。107は杯で口縁部周辺はコナデが強い。108は皿で底部は大きく平底でへ切りである。体部は内湾し口縁部は外反し端部尖っている。重ね焼きの痕跡が認められる。109は杯口縁部で外傾し端部丸い。色調は白っぽい。110は内湾する体部から丸い端部になり、重ね焼きの痕跡が残る杯である。111は稜椀と思われる。稜線部分の体部破片で、口縁部へは僅かに外反する。径は大きくはない。

112～115は土師器で、112は平底の椀底部で体部は外反する。底面にウツ記号の可能性もある凹線が2本底部から体部にかけて見られるが、工具痕かもしれない。粘土紐の拵ぎ目は明瞭でコナデ痕跡が認められ、砂粒含む。113はコナデ成形された把手部である。平面形は歪で外反し先はあまり尖らない。甕の把手と思われる。上面は皿状に丁寧に仕上げるが、下面は強いコナデ成形が見られるなど未調整に近い。114は甕口縁部で頸部の稜線は有さない。コナデ成形で頸部を作り端部周辺はコナデ

仕上げである。端部は角張り下方につまみ出している。体部内面はヘッジリによって稜線を作っており、小石粒を含んでいる。115 はほぼ完形のヨコテで仕上げられた器高の低い小皿で、平底でヘッジ調整を加えている。外面は赤い色調を呈している。

116～123 は中世の須恵器である。116～118 は突出平底で糸切り底の椀で、116 は粗い糸切りで中央にヘッジ痕跡が認められる。体部は内湾し、底部内面はコビ痕跡が残る。搬入品の可能性がある。117 も体部は内湾しコビ成形である。118 は体部内湾し中央部で変化点を有し、そこに沈線を持ってそこから強いヨコテを口縁部にかけて施している。口縁端部は外反し丸く納める。重ね焼きの痕跡が残り砂粒含む。119 は壺底部で平底から体部外反する。コビ成形からヨコテであるが、外面は歪で粘土紐の雑目やコビ痕跡が残る。120・121 は捏鉢口縁部で重ね焼きの痕跡が残る。120 は内側につまみ出し、121 は内外に肥厚する端部を持つ。ヨコテで120 は内湾し、121 は内傾する。122 は底部であるが古代の杯かもしれない。123 は捏鉢底部で平底から体部内湾する。

124 は瓦質鍋で端部角張り内側に尖らせている。表面磨滅している。125 は灰釉椀で内湾する体部に外傾する高台が付く。

F1 は鉄器で器種は明確にできないが、断面方形の板状で先は片側尖っている。刃先は明瞭でなく鈍い。時期は不明で釜などであろうか。以下は写真だけであるが、S2 は蛇紋岩製の敲き石と思われる。片側が尖っており、頭部に凹みが2ヶ所認められ使用痕と思われる。全体に擦痕が認められるが、石材が軟質であることからローリング痕の可能性もある。126・127 は縄文土器片で磨滅している。126 は表裏縄文かと思われ、127 は刺突文状の施文が見られる。



製塩土器

表1 土器観察表

番号	標別	器種	遺構	法量 (c m)				調整		備考
				口徑	器高	腹径	底径	外	内	
1	須志器	杯蓋	4区 SH01下層	11.6	残3.9			0707	0707	
2	須志器	杯	4区 SH01 床面北側	10.5	3.3		6.8	0707	0707	
3	須志器	杯	4区 SH01床面	(10.0)	3.1		(8.0)	0707	0707	
4	須志器	杯	4区 SH01	(12.0)	残3.3		(8.6)	0707	0707	ヘラ記号あり
5	須志器	杯	4区 SH01	12.3	4.05		8.8	0707	0707	
6	須志器	杯	4区 SH01南半上層表より上	(12.0)	残4.0		(5.4)	0707	0707	
7	須志器	杯	4区 SH01南半底層		残3.0		(8.0)	0707	0707	
8	須志器	杯もしくは蓋杯	4区 SH01西半底層	(17.5)	残3.4			0707	0707	
9	須志器	蓋	4区 SH01	(11.0)	残12.9			0707	0707	
10	須志器	器台もしくは蓋	4区 SH01床面 SH01床面北側	(30.6)	4.5		(8.0)	0707	0707	
11	土師器	高杯	4区 SH01 土器2	(14.8)	残4.5			3707	3707	
12	土師器	高杯	4区 SH01床面	15.1	残4.7			0707	0707	
13	土師器	高杯	4区 SH01床面北側	16.0	残5.8			3707	0707	割突痕あり
14	土師器	高杯	4区 SH01	15.4	12.3		12.6	3707	3707	覆り目あり
15	土師器	鉢	4区 SH01下層	(18.0)	6.2			3707	3707	
16	土師器	把平付鉢	4区 SH01	(13.8)	残8.1			0707		
17	土師器	蓋	4区 SH01	(12.4)	残8.2			0707		
18	土師器	蓋	4区 SH01	(13.6)	残10.6			3707	0707	
19	土師器	蓋	4区 SH01埋土	(16.0)	残6.8			3707	0707	
20	土師器	蓋	4区 SH01埋土	(20.0)	残4.4				3707	0707
21	土師器	蓋	4区 SH01	(19.0)	残4.6				0707	
22	土師器	蓋	4区 SH01床面南半	(15.2)	残4.9			3707	0707	
23	土師器	蓋	4区 SH01	(18.0)	残10.0			0707	0707	
24	土師器	甑	4区 SH01北半底層SH01床面	(20.0)	残7.5			3707	3707	
25	土師器	甑	4区 SH01カマド下層	(25.0)	残19.8			0707	0707	
26	土師器	甑	4区 SH01下層		残9.2		(13.0)	0707	0707	
27	土師器	甑	4区 SH01床面北側	(20.8)	10.1		(14.0)	0707	0707	
28	土師器	甑把手	4区 SH01南半上層		4.3×6.1			3707	0707	
29	土師器	甑	4区 SH01		残35.3	13.3	39.4	0707		
30	土師器	蓋	5区 SH02	(22.0)	残2.3			3707	0707	
31	須志器	杯	5区 SH06	(12.0)	3.8		(8.4)	0707	0707	
32	須志器	杯	5区 SH04東半	(13.4)	残3.2		(6.0)	0707	0707	
33	須志器	杯	5区 SH04 土塊1	(14.0)	2.9		(8.2)	0707	0707	
34	須志器	杯	5区 SH04床面	(13.0)	残2.6			0707	0707	
35	須志器	杯	5区 SH04東半		残1.8		(12.0)	0707	0707	
36	須志器	杯蓋	5区 SH04床面	(11.8)	1.0			0707	0707	
37	須志器	杯	5区 SH04西半		残2.0		(9.0)	0707	0707	
38	須志器	壺	5区 SH04床面 SH04中央部		残5.9		(8.0)	0707	0707	
39	須志器	平胎	5区 SH04東半		残10.9		(14.2)	0707	0707	2条の凹線
40	土師器	蓋	5区 SH04東半	(11.2)	残4.4			3707	0707	
41	土師器	器台	5区 SH04	(12.0)	残1.9					
42	土師器	製磁土器	5区 SH04東半		残1.9		(5.8)	3707	3707	
43	土師器	蓋	5区 SH05東半	(19.0)	残2.2			0707	0707	沈線
44	須志器	蓋	5区 SH06		残1.65		(4.0)	0707	0707	
45	須志器	杯	5区 SH06西半	(12.0)	残2.5			0707	0707	
46	土師器	製磁土器	5区 SH06伊周辺	(11.2)	残5.2					
47	土師器	製磁土器	5区 SH06 P6	(12.0)	残6.0			3707		
48	土師器	皿	4区 SB01	(10.8)	2.7		6.5	3707	3707	
49	須志器	杯	4区 SB02	(13.0)	3.0		(8.6)	0707	0707	
50	土製品	土師	5区 SB05 P51	典様2.5	厚み1.0					
51	須志器	杯	5区 SB07 P1		残1.4		(11.4)	0707	0707	
52	須志器	杯	5区 SB10 P61	(15.0)	残4.5		(12.0)	0707	0707	
53	土師器	杯もしくは壺	5区 SB11 P58		残2.1		(10.0)	3707		
54	土師器	蓋	4区 SA01 P32	(30.0)	残5.5			3707		1条の凹線
55	土師器	皿	4区 P7	(12.0)	残2.15		(6.0)			
56	土師器	皿	4区 P7	(14.6)	2.7		(8.0)			

番号	種別	器種	波長	法番 (cm)				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
57	須臾器	樽	4区 P63	(15.0)	残2.45			0707	0707	
58	土師器	製磁土器	4区 P44	(10.6)	残6.1			3C 成形	3C 成形	
59	須臾器	樽	5区 西半P1 P57	(13.4)	4.3		(5.0)	0707	0707	
60	須臾器	樽	5区 P1		残2.3		(7.0)	0707	0707	
61	須臾器	樽	5区 東半下直P2		残1.8		(6.0)	0707	0707	
62	須臾器	杯蓋	5区 東半上直P4		残0.8			0707、0707イ	0707	
63	須臾器	杯	5区 東半上直P4		残2.1		(11.4)	0707	0707	
64	土師器	杯	5区 P4	(13.4)	2.6		(8.2)	337	337	
65	須臾器	椀	5区 東半上直P5		残1.8			0707	0707	
66	土師器	樽	5区 P41		残0.8		(6.0)			
67	須臾器	杯	5区 P74	(9.0)	残3.1			0707	0707	
68	須臾器	杯	5区 P78	(16.0)	残2.5			0707	0707	
69	須臾器	高杯	4区 SX01南半	(12.0)	残3.9			0707	0707	2条の口縁
70	須臾器	樽	4区 SX01南半	(17.0)	残3.0			0707	0707	
71	須臾器	握鉢	4区 SX01	(23.4)	残7.8			0707	0707	
72	土師器	皿	4区 SX01埋土北半	(10.0)	残1.65				3C 49A	
73	土師器	皿	4区 SX01北半	(21.0)	残6.0			3C 49A、49B	3C 49A	
74	土師器	蓋	4区 SX01北半	(18.0)	残5.3			49A		
75	土師器	蓋	4区 SX01南半炭層より上	(22.0)	残4.6			337	337、49A	
76	土師器	蓋	4区 SX01南半	(21.4)	残4.25			337		口縁に凹縁
77	土師器	鍋	4区 SX01	(21.8)	残7.45			337、997		
78	土師器	蓋	4区 SX01南半	(23.0)	残2.75			337	0707	
79	須臾器	樽	4区 SX01埋土北半	(22.8)	残3.2			0707	0707	
80	陶器	鉢	4区 SX01南半	(23.0)	残3.1					
81	須臾器	蓋	4区 SX01		残9.0		(11.0)	49Aイ	0707	
82	土師器	皿	4区 SK01	(8.0)	1.5		(4.2)			
83	土師器	皿	4区 SK01	(11.8)	残2.15					
84	土師器	皿	4区 SK01	(11.8)	残2.0		(6.2)		3C 49A	
85	須臾器	握鉢	4区 SK01	(23.0)	残3.4			0707	0707	
86	須臾器	握鉢	4区 SK01		残2.2		(9.0)	0707	0707	
87	赤生土器	蓋	5区 SR01 底	(20.0)	残3.4			337		3条の口縁
88	須臾器	杯	5区 SR01		残1.4		(12.8)	0707	0707	
89	須臾器	杯	5区 SR02	(13.6)	3.0		(9.6)	0707	0707	
90	須臾器	樽	5区 SR02	(14.9)	残4.1			0707	0707	
91	土師器	樽	5区 SR02旧河湾	(15.4)	6.4		(8.6)	337	337	
92	赤生土器	蓋	5区 SR03	(11.0)	残10.7			49Aキ		口縁に3条の凹縁
93	土師器	杯	5区 SR03支流	(13.6)	残3.2			337	337	
94	土師器	杯	5区 SR03	(13.0)	残2.9					
95	土師器	杯	5区 SR03		残2.5		(13.0)	337	337	
96	須臾器	杯	5区 SR03	(15.0)	2.9		(12.0)	49Aリ	0707	
97	須臾器	杯	5区 SR03	(16.6)	2.8		(13.0)	0707	0707	
98	須臾器	杯蓋	5区 SR03	(17.0)	残1.3			0707	0707	
99	須臾器	杯蓋	5区 SR03		残1.2			0707	0707	
100	須臾器	杯	5区 SR03	(15.8)	6.1		(10.0)	0707	0707	
101	須臾器	杯	5区 SR03		残2.3		(12.0)	0707	0707	
102	土師器	杯	5区 SR03		残1.3		(10.0)	337、337キ	337、3C 49E	
103	土師器	製磁土器	5区 SR03	(10.0)	残4.05			3C 49A	3C 49A	
104	土師器	製磁土器	5区 SR03	(13.0)	残4.3			3C 49A	3C 49A	
105	土師器	蓋	5区 SR03	(30.0)	残4.9			49A		口縁に凹縁あり
106	須臾器	杯蓋	5区 山崎倉		残1.5		(17.0)	0707	0707	
107	須臾器	杯	4区 橋城掘削	(12.0)	残3.0			0707	0707	
108	須臾器	皿	5区 西半機械部精査	(15.0)	1.6		(11.0)	0707	0707	
109	須臾器	杯	5区 山崎倉	(17.0)	残4.2			0707	0707	
110	須臾器	杯	5区 西半機械部精査	(16.0)	残2.3			0707	0707	
111	須臾器	椀	5区 北東部機械部精査		残2.8			0707	0707	
112	土師器	樽	5区 東半下直P3		残2.2		(6.6)			

番号	種別	器種	遺構	法量 (cm)				調整		備考
				口径	器高	腹径	底径	外	内	
113	土師器	磨器手	4区 人力精査							
114	土師器	甕	4区 機城掘出	(30.8)	残5.1		070F7	070F7		
115	土師器	皿	5区 西半機城山精査	7.7	1.2	5.7	070F7	070F7		
116	須恵器	椀	3区 土層 清浄中		残2.5	(6.6)	070F7	070F7		
117	須恵器	椀	5区 山精査		残1.9	(6.0)	070F7	070F7		
118	須恵器	椀	5区 埴岡 山精査	(16.5)	残6.3	(8.6)	070F7	070F7		
119	須恵器	甕	5区 東東部 西精査		残8.5	(14.6)	070F7	070F7		
120	須恵器	握鉢	4区 機城掘出	(18.0)	残3.5		070F7	070F7		
121	須恵器	握鉢	5区 西半機城山精査	(24.4)	残3.7		070F7	070F7		
122	須恵器	杯	5区 西半機城山精査		残1.3	(9.0)	070F7, 070F7	070F7		
123	須恵器	握鉢	5区 西東部山精査		残1.5	(8.6)	070F7	070F7		
124	瓦質土器	鍋	4区 人力精査	(21.0)	残4.6					
125	陶器	椀	5区 東半下西山精査		残2.6	(6.0)	070F7	070F7		
126	縄文土器		5区 東半下西 山精査							
127	縄文土器		5区 西半機城山精査							
F1	鉄製品	釵	1区		長さ6.4×幅1.6×厚み0.3-0.9					
S1	石製品	礫石	4区 SK01		長さ12.2×幅3.8×厚み0.9					
S2	石製品	砕き石	5区 SR01		8.4×6.4					



SH01 土師器集合写真

IV おわりに

林谷遺跡は令和元・3年度に本発掘調査を行った。調査面積は4,100 m²とさほど広くはないが多大な成果を得た。丘陵部と山裾の水田部では時期差があり、遺跡の性格が異なる。丘陵部の時期は出土遺物がほとんどないことから明確にできないが、縄文時代の遺跡で落とし穴を中心とする土坑群などを検出している。山裾は主に古墳時代から奈良時代の集落で、竪穴建物6棟・掘立柱建物13棟・柵2列・落ち込み2基・鍛冶炉2基・溝2条などを調査した。遺物は土師器・須恵器・製塩土器と台石である。

丘陵部の調査では落とし穴と考えられる土坑群が注目される。上部を削平されているものが多いので確実なことは言えないが、底に逆茂木と考えられるピットが認められる土坑と、ある程度の深さのあるものを落とし穴としたものの一覧が表2で21基を検出している。平面形は楕円形・円形が大半であるが隅円方形のものもある。21基中12基が底面にピットを有している。ピットの径は0.1～0.37 mで、深さは最深0.25 mである。調査区の地形は尾根部であるが、南北方向の尾根で東西は傾斜し、特に東側は急な谷部になっている。落とし穴の位置が尾根上に並んでいることは他遺跡と同様である。ただ偶然かもしれないが、底面にピットを有する土坑は尾根上よりも一段下がった斜面部に多いことが指摘できる。

平野部の調査では古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴建物を検出している。SH06は突出部を有する大形の円形住居である。形態からは弥生時代後期を指向するが、該当する遺物が出土していない。古墳後期から奈良時代の竪穴建物に切られていることから、床面の残存状態は良好とは言えない。さらに建物の切り合い関係のない部分でも鍛冶炉が検出されており、この2基の鍛冶炉は奈良時代と思われるので、SH06の床面は保全されず遺物を保有していないものと考えられる。そのことから出土遺物は新しい時期であるが後世のもので、SH06は弥生時代後期まで遡る住居と想定している。SH01～SH05は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての竪穴建物である。SH01は北西辺中央に作り付けの竈を築いている。焼成部は不定楕円形で竈本体上部には石材を積んでいる。

SH04は長方形プランの4本柱で2つの炉を有している。北西辺中央と床面中央に炉を築いている。中央炉は楕円形土坑縁辺部に溝を掘り込み強く焼けている。被熱状況などは大中遺跡や美乃利遺跡の住居に類似している。鉄生産などの工房の可能性が高いと考えている。

掘立柱建物は13棟調査した。柱穴から遺物が出土しているのは少数である。SB02とSB07出土が杯Aで、奈良時代中頃と思われる。主軸方向はSB02が南北を向き、SB07もN5°Eと南北に近い。この主軸を持つ建物はSB03・SB06・SB13でこの5棟が古段階の建物と思われる。それに対してN24°W前後を主軸とするSB04・SB09・SB11・SB12の4棟が次の段階で、さらに西へN30°WとなるSB05とSB10がその次の時期である。SB04とSB05は平面的に切り合い関係がある。SB01は遺物から新しい建物で平安時代であろうか。SB06は上面で検出しているが、大きな時期差はないと思われる。

今回検出した遺構で特記されるのが鍛冶炉であろう。SH06床面上で検出された奈良時代の2基の炉跡で、箱型炉である。長方形プランで断面は方形で底に炭層が存在する。北炉の方が幅は広いが形状・堆積状況は似ており、鍛冶炉と思われる。南東に位置する桜東畑遺跡で焼塩遺構が検出され、奈良時代の塩の再分配に関与したと考えられ、それに加えて鉄生産を高岡で行っていたことになる。

表 2 林谷遺跡 1区～3区落とし穴状遺構一覧

調査区	遺構番号	平面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	底面ビット			底面ビット
						長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	
1区	SK05	楕円	1.8	0.8	0.45				無し
	SK06	円形	1.11	0.92	0.92				
	SK07	円形	1.2	-	0.21				
2区	SK02	円形	0.85	0.62	0.07	0.14	0.10	0.20	有り
	SK04	円形	1.20	0.98	0.20	0.37	0.28	0.21	
	SK10	楕円	0.94	0.78	0.20	0.24	0.20	0.15	
3区	SK18	楕円方形	1.17	0.93	0.88				無し
	SK09	楕円	0.96	0.86	0.21				無し
	SK12	楕円	0.90	0.67	0.20	0.20	-	0.25	有り
	SK17	円形	0.88	0.80	0.16	0.20	0.20	0.20	
	SK18	楕円	0.82	0.55	0.02	0.20	0.20	0.25	
	SK19	楕円	1.06	0.68	0.12				無し
	SK20	円形	1.00	0.68	0.20	0.20	0.20	0.01	有り
	SK21	円形	1.20	0.88	0.46	0.20	0.20	0.12	
	SK22	円形	0.80	0.69	0.25	0.25	0.24	-	
	SK23	楕円	1.32	0.62	0.30				無し
	SK24	円形	1.01	0.88	0.28				
	SK25	楕円	1.08	0.65	0.38				
	SK26	楕円	0.80	0.51	-	-	-	-	有り
	SK27	円形	0.64	0.57	0.27	0.19	0.19	0.07	
	SK28	楕円	0.90	0.60	-	0.18	0.18	-	

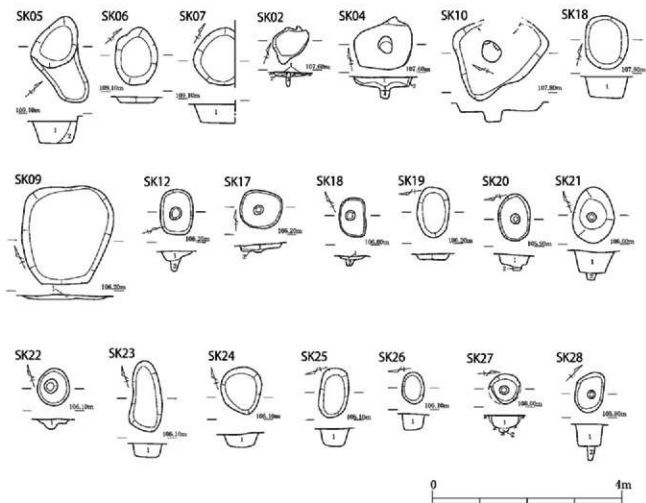


図 5 落とし穴集成図

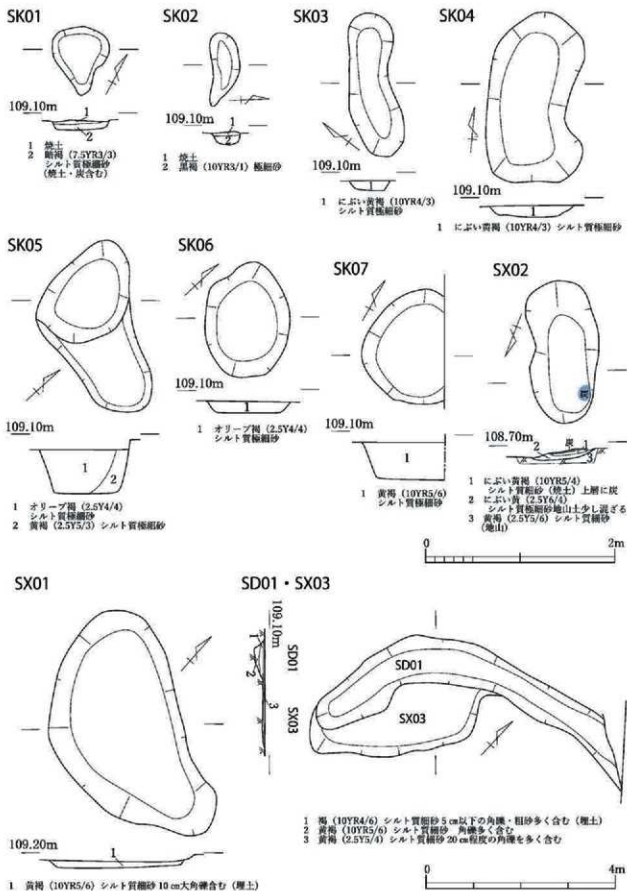
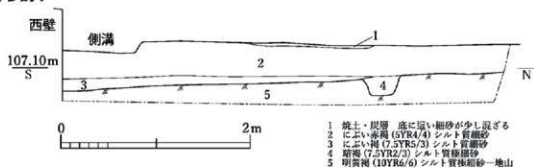


図7 1区遺構実測図 (SK01～07・SX01～03・SD01)

北壁断ち割り



- 1 焼土・泥層 底に薄い細砂が少し混ざる
- 2 におい赤褐色 (5YR4/4) シルト質細砂
- 3 におい黄 (7.5YR5/3) シルト質細砂
- 4 暗褐色 (7.5YR2/3) シルト質粘細砂
- 5 明黄褐色 (10YR6/6) シルト質粘細砂—地山

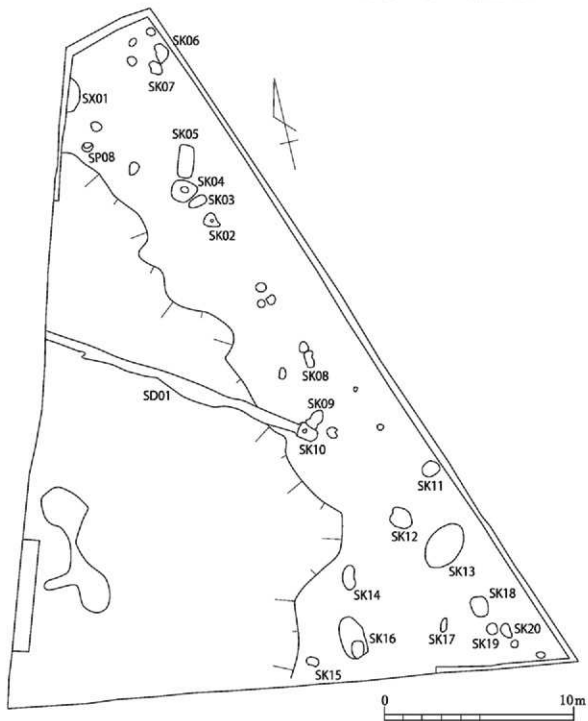
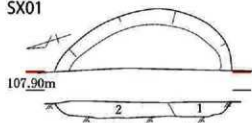


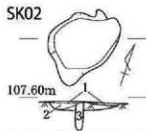
図8 2区平面図・北壁土層断面図

SX01



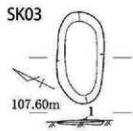
- 1 赤褐 (SYR4/6) シルト質極細砂
- 2 明黄褐 (10YR6/6) シルト質極細砂

SK02



- 1 オリーブ褐 (7.5Y4/4) シルト質極細砂
- 2 黄褐 (10YR5/6) シルト質極細砂
- 3 暗褐 (10YR3/3) シルト質極細砂

SK03



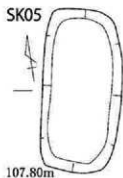
- 1 オリーブ褐 (7.5Y4/4) シルト質極細砂

SK04



- 1 にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 2 明黄褐 (2.5Y6/6) 細砂
- 3 明黄褐 (10YR6/6) シルト質細砂 (木片出土)
- 4 明黄褐 (10YR7/6) シルト質細砂

SK05



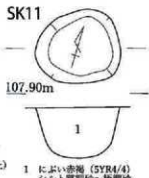
- 1 オリーブ褐 (2.5Y4/4) 極細砂

SK08



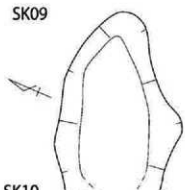
- 1 灰黄褐 (10YR4/2) シルト質細砂 (角礫含む)
- 2 にぶい赤褐 (10YR6/4) シルト質極細砂 (地山客土)

SK11

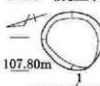


- 1 にぶい赤褐 (5YR4/4) シルト質細砂～極細砂

SK09

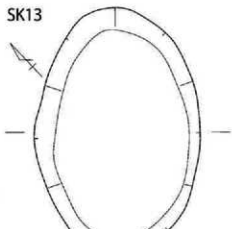


SK15 (焼土坑)



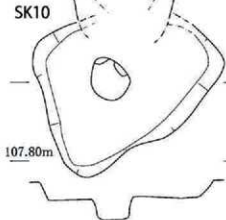
- 1 にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト質極細砂 (焼土含む)
- 2 褐灰 (10YR4/1) シルト質極細砂 (灰・焼土含む)
- 3 灰層

SK13

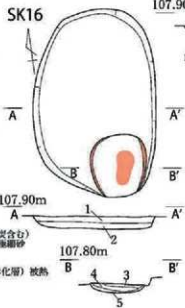


- 1 にぶい赤褐 (5YR4/4) シルト質極細砂

SK10



SK16



- 1 灰黄褐 (10YR4/2) 細砂 (小礫・炭含む)
- 2 にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 3 灰褐 (5YR4/2) シルト質細砂
- 4 灰層
- 5 にぶい赤褐 (5YR4/4) 極細砂 (赤化層) 被熱

SK18



- 1 にぶい赤褐 (5YR4/4) シルト質細砂～極細砂

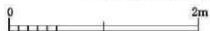


図9 2区遺構実測図

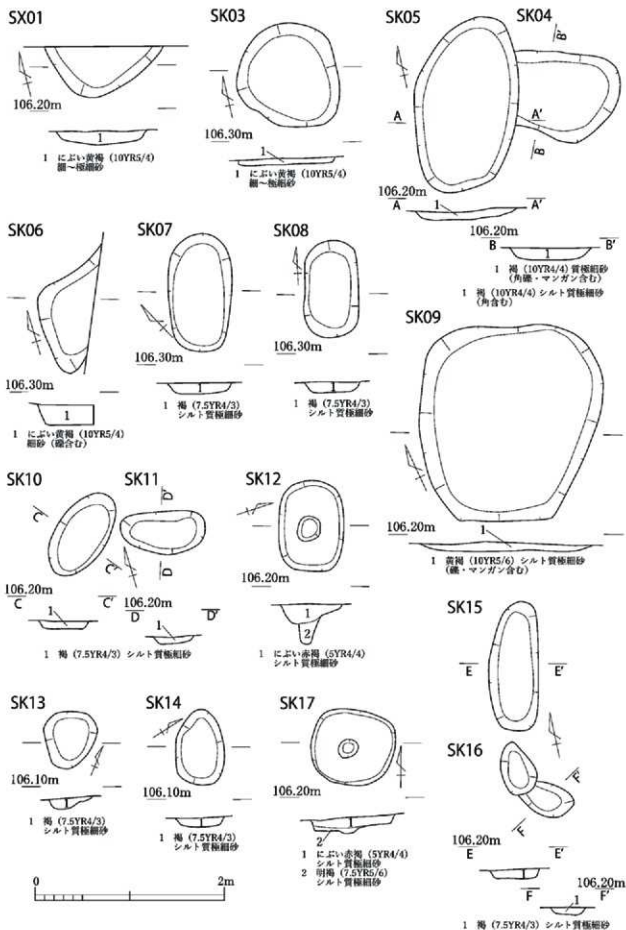


図 11 3 区遺構実測図 (1)

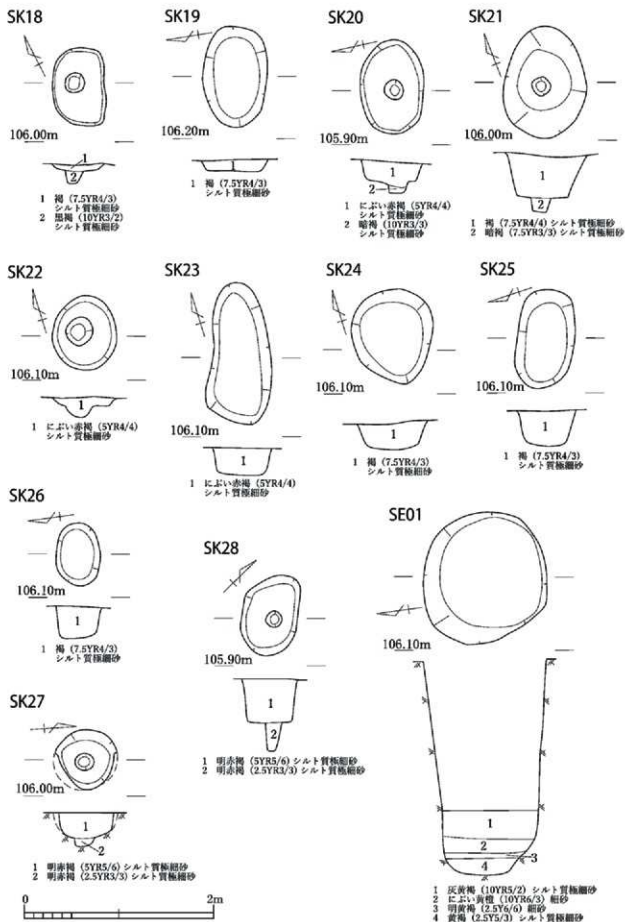


図 12 3 区遺構実測図 (2)

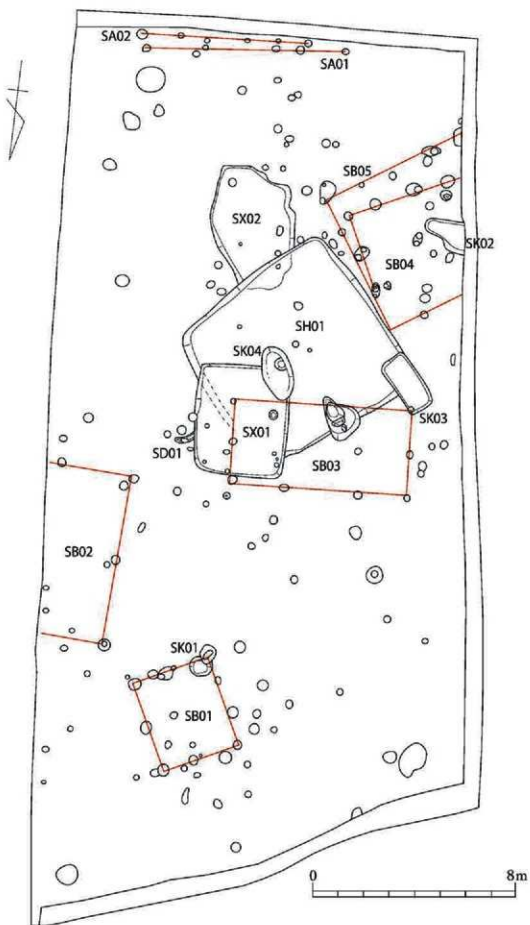
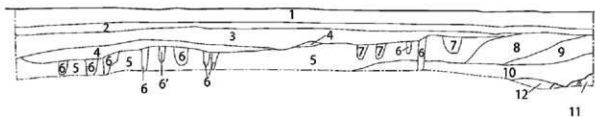


图 13 4区遺構平面図

4区西壁

96.80m
S

N



- 1 粘土
- 2 床土 上面にマンガン層 上右は によい黄褐色 (10YR4/5/4) 細砂
下は 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂 (マンガン含む)
- 3 暗褐色 (7.5YR3/3) 極細砂 (小礫含む)
- 4 褐 (7.5YR4/3) 極細砂
- 5 によい黄褐色 (10YR5/3) シルト質極細砂 (粘性強い) 遺構面
- 6 暗褐色 (10YR3/4) シルト質極細砂
- 6' 褐 (10YR4/4) シルト質極細砂
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂礫 (角礫と細砂)
- 8 暗褐色 (7.5YR4/3) 3層と同質で多少く含む (砂礫層)
- 9 暗褐色 (7.5YR3/2) 砂礫
- 10 褐 (7.5YR4/3) 砂礫
- 11 によい黄褐色 (10YR5/4) シルト質極細砂 (地山) 粘性強い
- 12 によい黄褐色 (10YR5/3) シルト質極細砂 粘性強い

図 14 4区西壁土層断面図

SH01

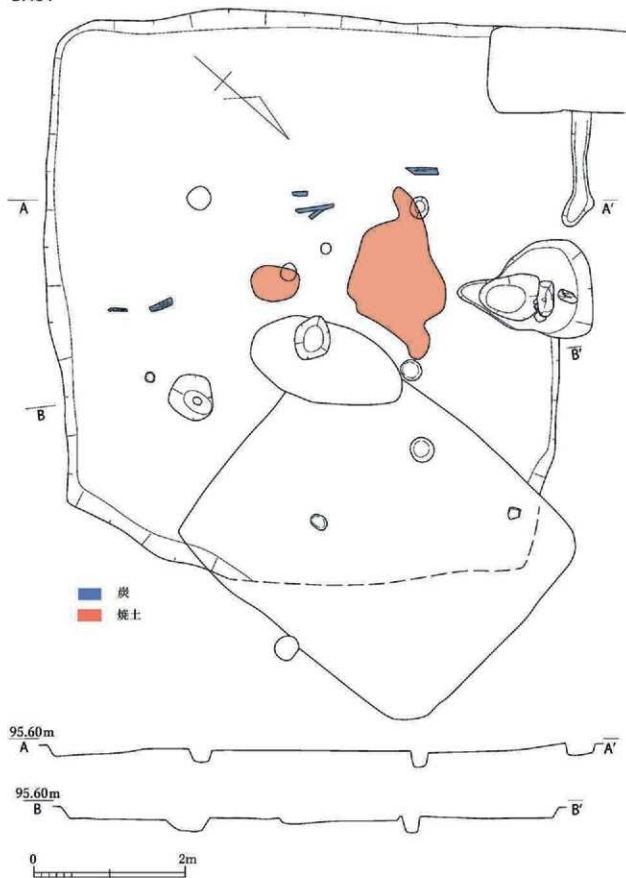
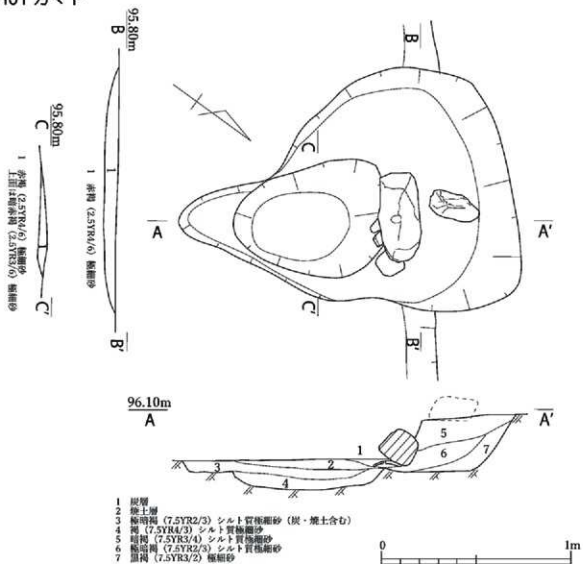


图 15 4 区遺構実測図 (1) (SH01)

SH01 カマド



土器出土状況

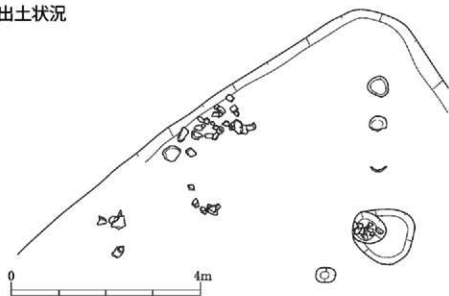
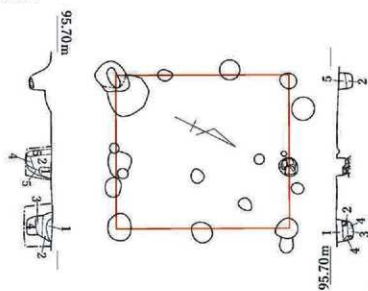


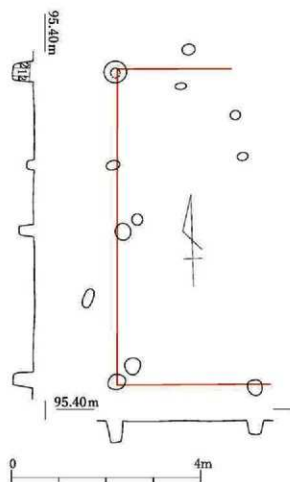
図 16 4 区遺構実測図 (2) (SH01 カマド・土器出土状況)

SB01



- 1 敷層 (10YR3/3) シルト質細砂 2cm大角礫多く含む
- 2 階層 (10YR3/4) シルト質細砂 2cm大角礫多く含む
- 3 礎 (10YR4/4) シルト質細砂 粗礫含む
- 4 におい貴岡 (10YR4/3) シルト質細砂 粗礫含む
- 5 2の上に礎 (10YR4/4) まだらに含む

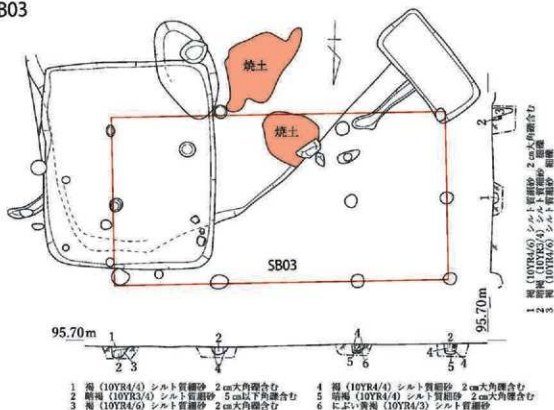
SB02



- 1 黒層 (10YR3/1) シルト質極細砂
- 2 階層 (10YR3/3) シルト質極細砂

図 17 4区遺構実測図 (3) (SB01・SB02)

SB03



SB04・SB05

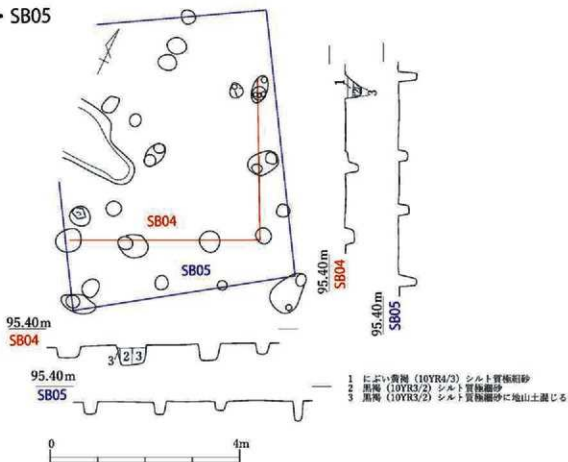
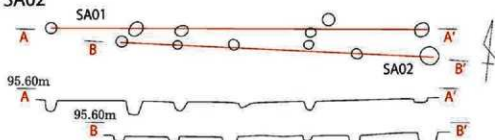
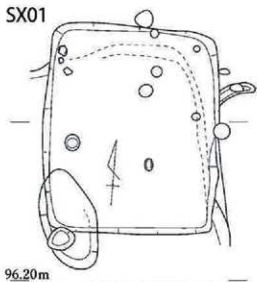


図 18 4区道構実測図 (4) (SB03～SB05)

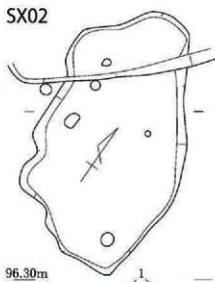
SA01・SA02



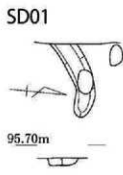
SX01



SX02



SD01

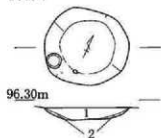


- 1 堀 (10YR4/4) シルト質細砂
土砂層・須根層含む 1cm程度の細礫や多い
- 2 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト質細砂
地山土混ざる 細礫少し含む
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト質細砂
土砂・1~5cm層を含む

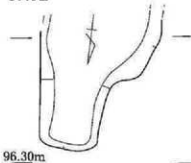
- 1 堀 (10YR4/4) シルト質細砂 5cm以下角礫含む
- 2 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト質細砂 地山の角礫含む



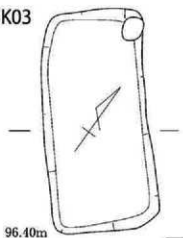
SK01



SK02



SK03



- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト質極細砂
(灰・土器・燧土含む)
- 2 堀 (10YR4/6) シルト質極細砂
(1の土まだらに含む)

- 1 暗褐色 (10YR3/4) シルト質極細砂
(灰・土器含む)
- 2 堀 (10YR4/6) シルト質極細砂
(細礫少し含む)

- 1 堀 (10YR4/4) シルト質極細砂
土器片含む 1cm~3cm大層を含む
- 2 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 3 暗褐色 (10YR3/4) シルト質極細砂

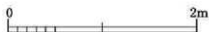
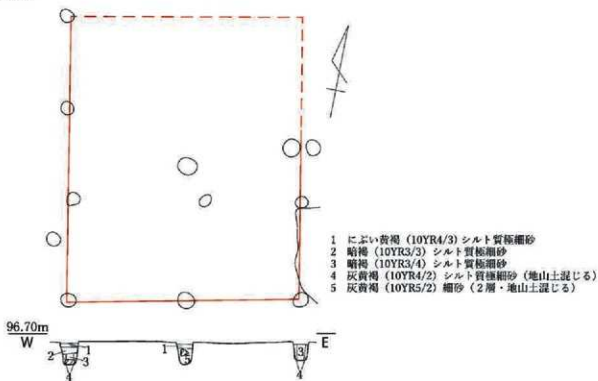


図 19 4区遺構実測図 (5) (SA01・02・SX01-02・SD01・SK01-03)

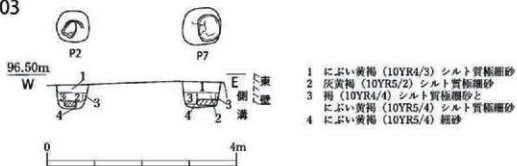


図 20 5区東半上層平面図

SB06



SA03



P4・P3

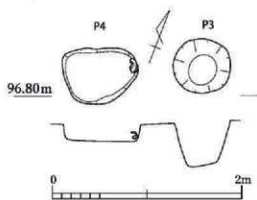


図 21 5区東半上層遺構図

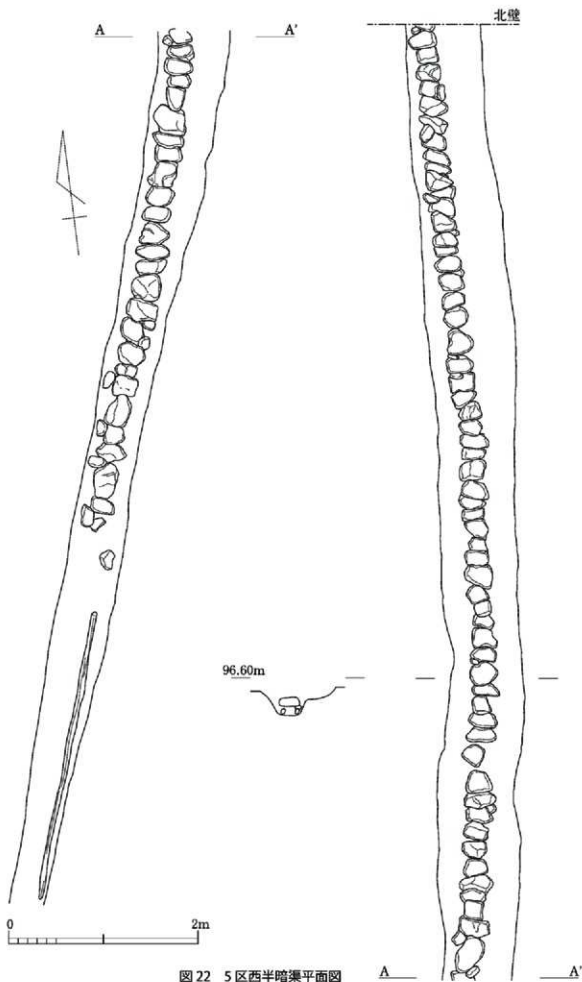


图 22 5区西半暗渠平面图

SH03

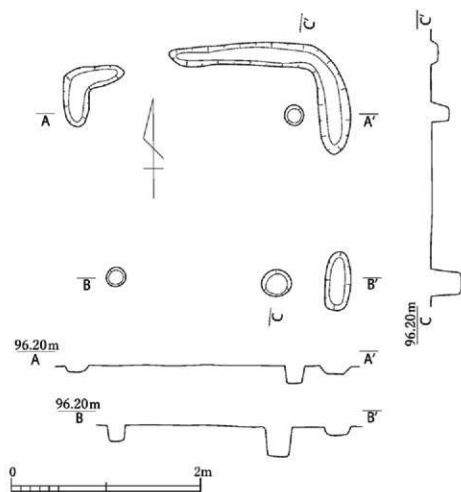


图 23 5 区東半下層遺構圖

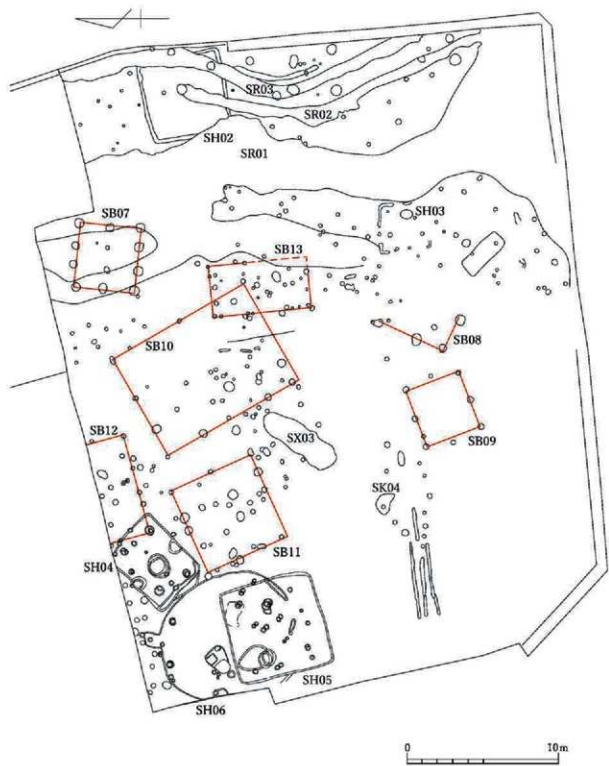
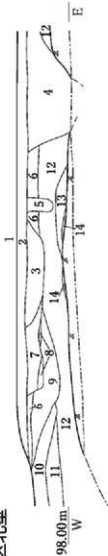


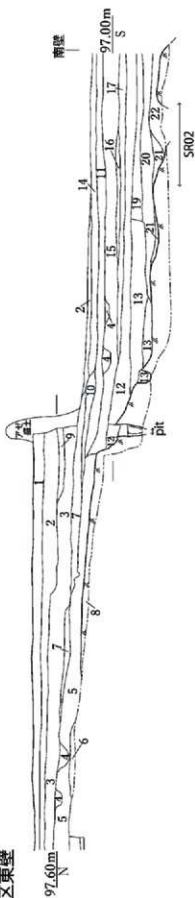
图 24 5区下层平面图

5区北壁



- 1 粘土質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂
- 2 粘土質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂 (区・小礫含む)
- 3 砂質泥 (角礫・円礫混じり)
- 4 砂質泥 (10YR6/2) シルト質極細砂
- 5 砂質泥 (10YR6/2) シルト質極細砂
- 6 泥質泥 (10YR4/3) シルト質極細砂
- 7 灰質泥 (10YR4/2) シルト質極細砂 (区・小礫含む)
- 8 粘土質泥 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 9 粘土質泥 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 10 粘土質泥 (10YR6/3) 粗砂 (小礫含む)
- 11 泥質泥 (2.5Y5/3) シルト質極細砂
- 12 泥質泥 (2.5Y5/2) 中砂
- 13 泥質泥 (2.5Y5/2) 粗砂
- 14 粘土質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂 (地山)

5区東壁



- 1 粘土質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂 粘土混じり
- 2 灰質泥 (10YR6/4) 粗砂
- 3 灰質泥 (10YR6/2) シルト質極細砂
- 4 砂質泥 (10YR4/1) 砂質 (角礫)
- 5 砂質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂 (上面にヤングン層)
- 6 泥質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂
- 7 泥質泥 (10YR5/6) シルト質極細砂
- 8 粘土質泥 (10YR5/4) シルト質極細砂
- 9 粘土質泥 (10YR6/4) シルト質極細砂
- 10 粘土質泥 (10YR4/2) シルト質極細砂
- 11 灰質泥 (10YR4/2) シルト質極細砂 (ヤングン含む)
- 12 粘土質泥 (10YR5/4) 粗砂
- 13 泥質泥 (10YR4/1) 粗砂 (粗砂多く含む)
- 14 灰質泥 (10YR6/2) 粗砂
- 15 砂質泥 (10YR5/4) 粗砂
- 16 泥質泥 (10YR4/4) シルト質極細砂 (ヤングン含む)
- 17 泥質泥 (10YR4/4) シルト質極細砂 (ヤングン多く含む)
- 18 粘土質泥 (10YR4/3) 粗砂
- 19 泥質泥 (10YR5/2) 粗砂
- 20 泥質泥 (10YR4/2) 粗砂 (粗砂多く含む、円礫も混じり)
- 21 泥質泥 (10YR4/2) 粗砂
- 22 泥質泥 (10YR4/4) 中砂

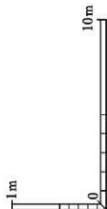


図25 5区北壁中央・東壁断面図

SH02

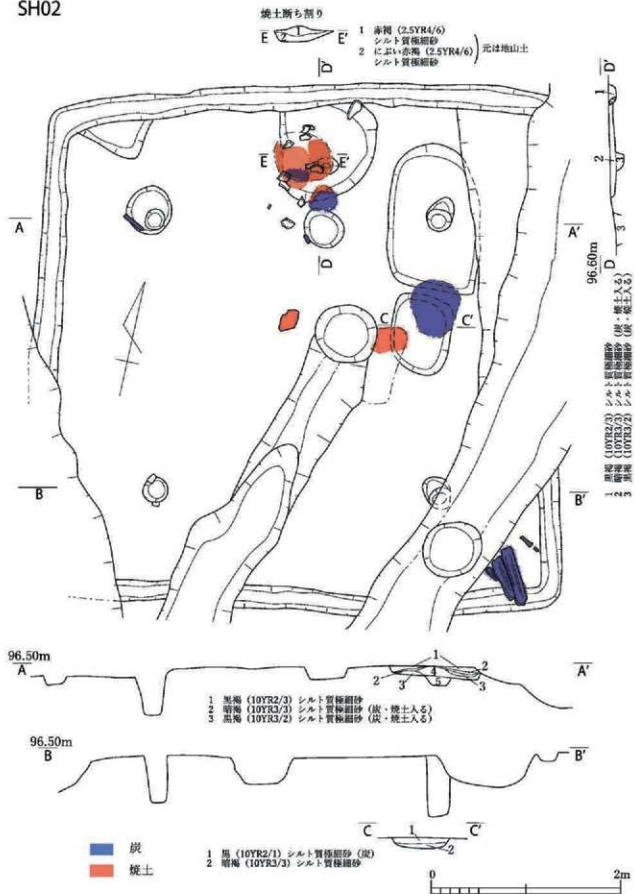


図 26 5区遺構実測図 (1) (SH02)

SH05

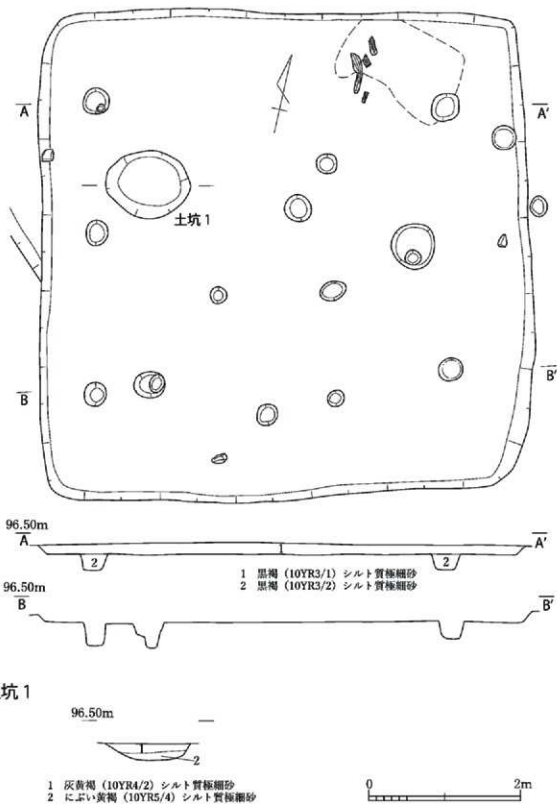


図 28 5区遺構実測図 (3) (SH05)

SH06

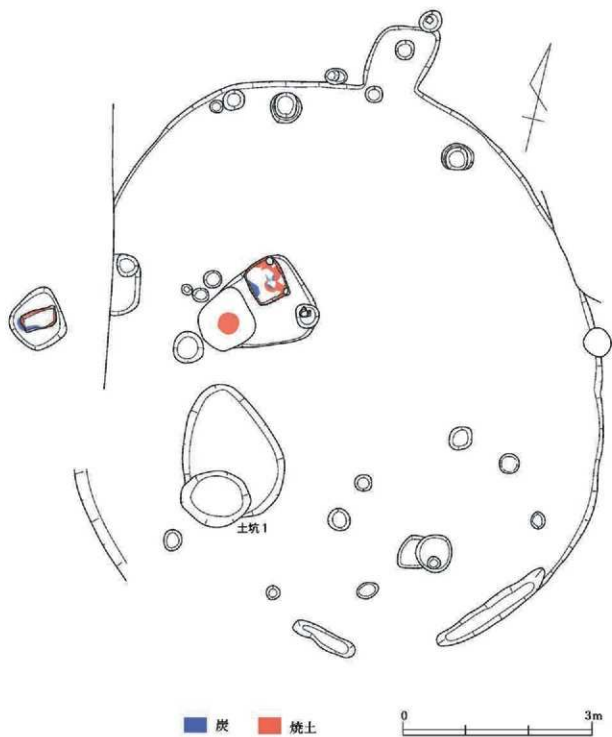
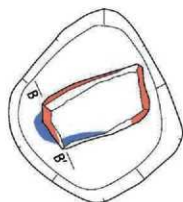
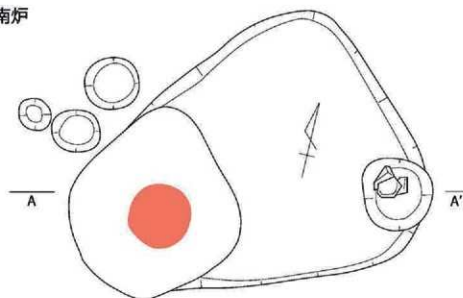


图 29 5区遺構実測図(4) (SH06)

南炉



96.40m

B

B'



1 灰褐 (7.5YR4/2) 極細砂 灰多く含む

北炉



96.40m



1 によく赤褐 (5YR5/3) 極細砂

2 褐灰 (5YR4/1) 極細砂 (灰混じる)

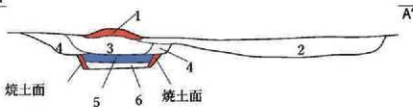
3 灰層

4 被熱層 (地山)

■ 窟・甕状の焼土面 赤褐 (2.5YR4/8)

96.40m

A



■ 炭
■ 焼土

1 堆土層

2 黒褐 (5YR3/1) 極細砂 (炭含む)

3 暗褐 (7.5YR3/3) 極細砂 (焼土含む)

4 暗赤褐 (5YR3/3) 極細砂

5 灰層

6 黒褐 (7.5YR3/2) 極細砂

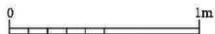
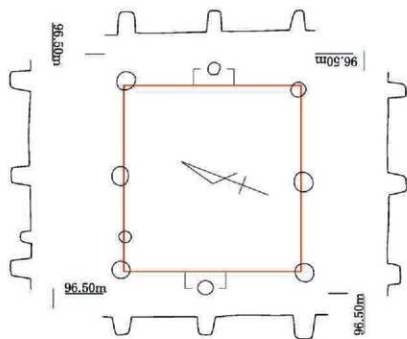


図 30 5区遺構実測図 (5)

SB09



SB11

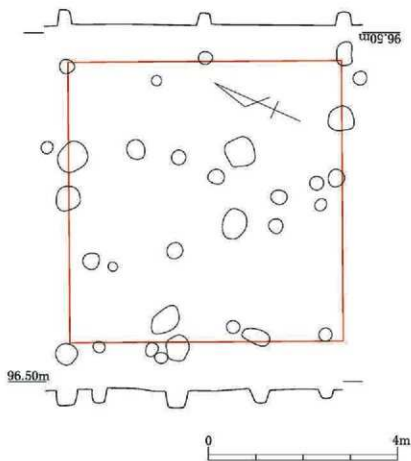
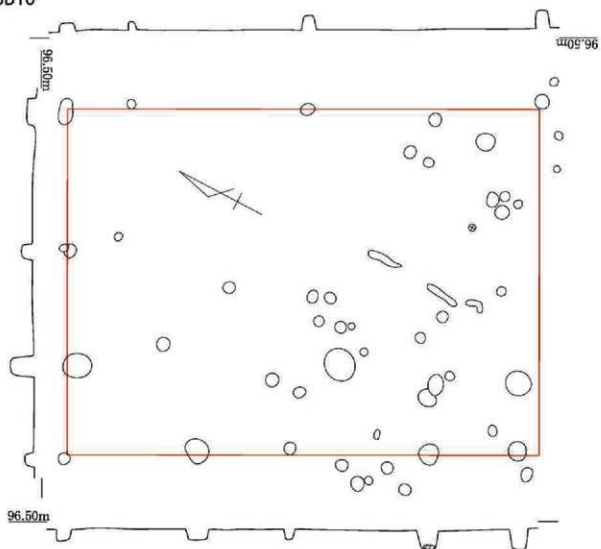


图 32 5 区遺構実測図 (7) (SB09・SB11)

SB10



SB12

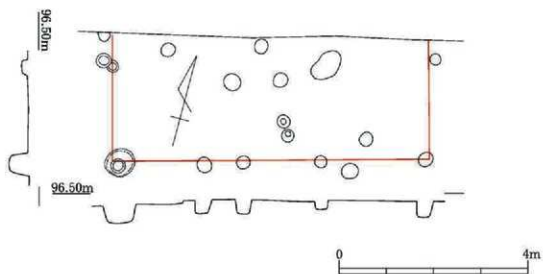
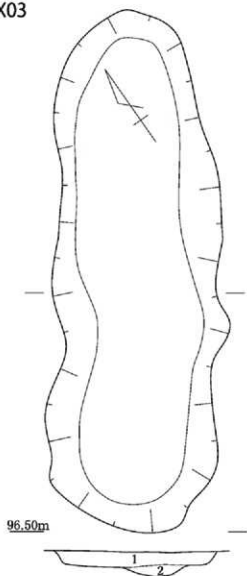


图 33 5区遺構実測図(8)(SB10・SB12)

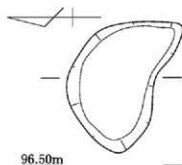
SX03



96.50m

- 1 黒褐 (10YR2/2) 極細砂 (小礫・明黄褐細砂含む)
 2 暗褐 (10YR3/3) シルト質極細砂

SK04



96.50m

- 1 暗褐 (10YR3/3) シルト質極細砂



図 34 5 区遺構実測図 (9) (SX03・SK04)

SH01

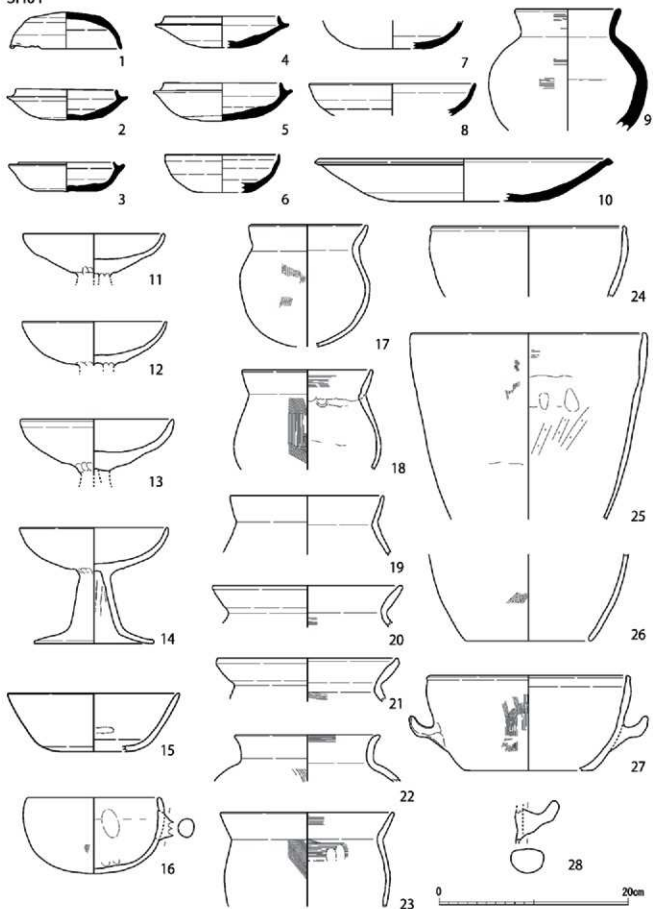
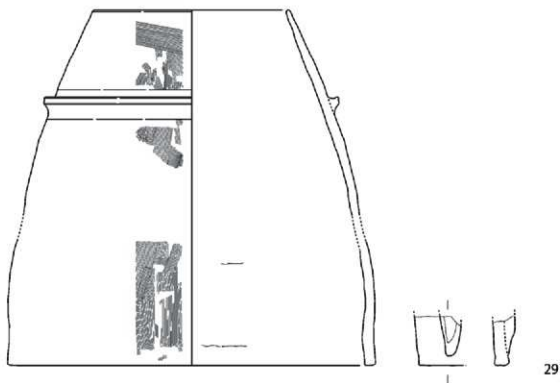


图 35 出土物实测图 (1)

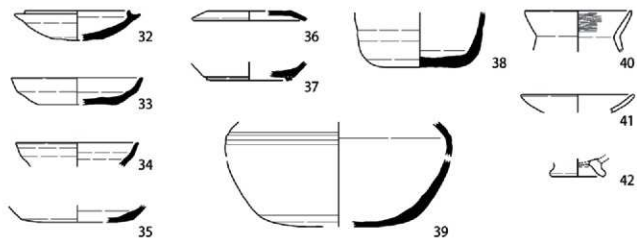
SH01



SH02



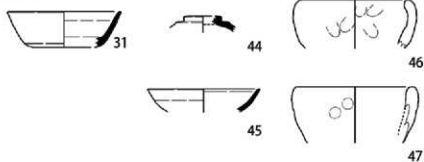
SH04



SH05



SH06



0 20cm

图 36 出土遺物実測図 (2)

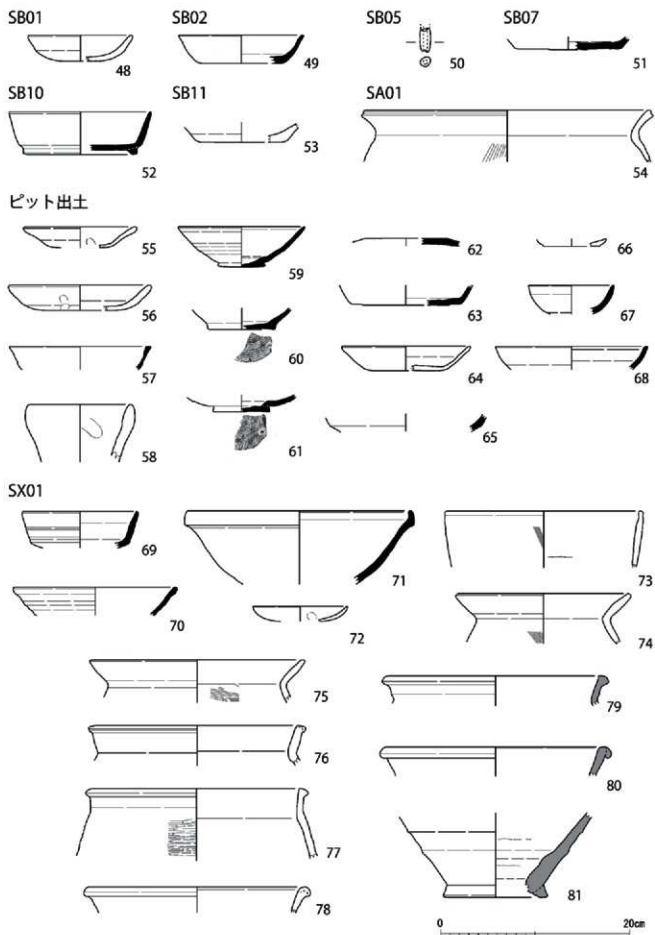


図 37 出土遺物実測図 (3)

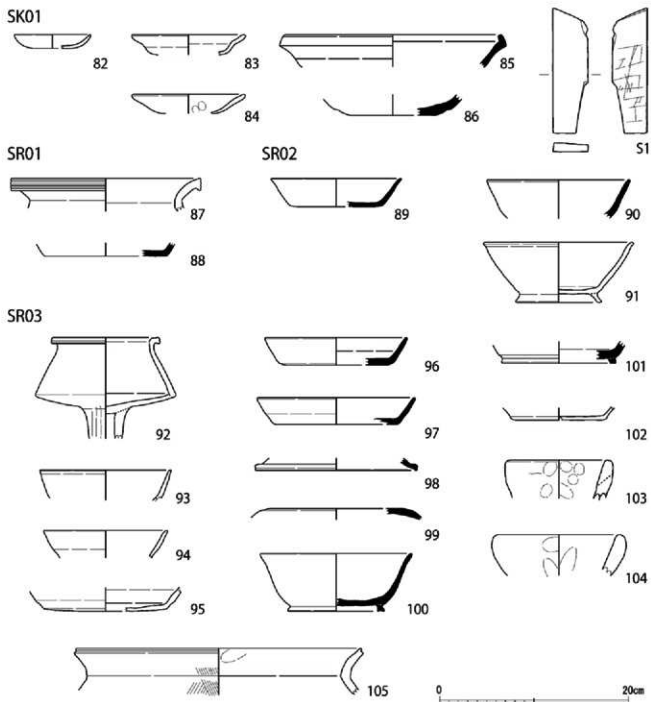


图 38 出土遺物実測図 (4)

包含層

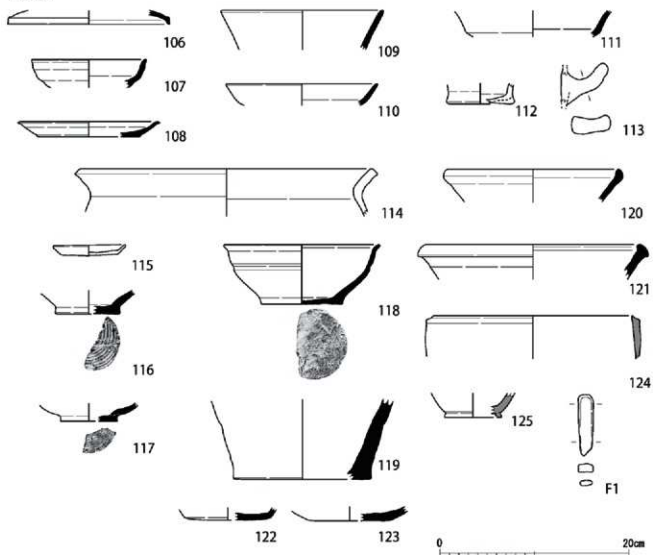


图 39 出土遺物実測図 (5)

写真図版





1区空中写真（北上空から）



1区全景（北から）



1区垂直写真



調査前 (北から)



1区全景 (南から)



SR01 断面 (南から)



SR01 調査風景



SX01 検出状況 (南から)



SX01 調査風景



SX01 アゼ (南から)



SX01 (南から)

1区



SX02 断面 (南から)



SX02 (南から)



SX03・SD01 アゼ (西から)



SX03・SD01 アゼ (西から)



SX03 調査風景



SX03・SD01 アゼ (西から)



東壁北半



東側谷地形断面 (北から)



SK01 (南から)



SK02 焼土 (南から)



SK03 (南から)



SK04 (南から)



SK05 (南から)



SK06 (西から)



SK07 (西から)



SD01 (東から)

2区



空中写真（西上空から）



垂直写真



北上空から



南上空から



北上空から



全景（北から）



全景（南から）



全景（南から）



調査前（南西から）



埋戻し後（南西から）

2区



土坑群 (南から)



南東部土坑群垂直写真



耕作痕



炭検出状況



SK01 断面 (南から)



SK01 (南から)



SK02 断面 (西から)



SK03 断面 (南から)



SK03 (南から)



SK03 底ビット断面 (南から)



SK04 断面 (南から)



SK05 断面 (南から)



SK06 断面 (南から)



SK07 断面 (南から)



SK08 炭検出状況 (西から)



SK09 アゼ (南から)

2区



SK09 底ビット検出状況



SK09 調査風景



SK09・08 (南から)



SK09・08 (東から)



SK10 断面 (南から)



SK10 (南から)



SK11 (南から)



SK13 断面 (西から)



SK14 検出状況 (南から)



SK14 断面 (南から)



SK14 (東から)



SK14 焼土坑 (南から)



SK14 焼土坑断面 (南から)



SK14 調査風景



SK15 断面 (南西から)



SK16 (南から)

2区



SK17 断面 (南から)



SK8・19 断面 (南から)



SX01 断面 (西から)



SX01 (西から)



調査区中央水田溝



北半全景 (南東から)



調査風景



調査風景



垂直写真 (1～3区)



垂直写真 (3区)



調査前 (北西から)



調査前 (南西から)

3区



機械掘削



人力掘削



攪乱 1 (南から)



攪乱 2 (南から)



丸太材出土状況 (南から)



SK01 断面 (南から)



SK02 アゼ (南から)



SK02 アゼ (南から)



SK03 断面 (南から)



SK03 (南から)



SK04 断面 (南から)



SK04・05 (南から)



SK05 断面 (南から)



シート養生



SK06 断面 (南から)



SK06 (南から)

3区



SK07 断面 (南から)



SK07 (南から)



SK08 断面 (南から)



調査風景



SK09 断面 (南から)



SK09 (南から)



SK10 断面 (南から)



SK10 (南から)



SK11 断面 (南から)



SK11 (南から)



SK12 断面 (東から)



SK12 (南から)



SK13 断面 (南から)



SK14 断面 (南から)



SK17 断面 (南から)



SK17 (南から)

3区



SK18 断面 (南から)



SK18 (南から)



SK19 断面 (南から)



SK19 (南から)



SK20 断面 (南から)



SK20 (南から)



SK21 断面 (南から)



SK21 (南から)



SK22 断面 (南から)



SK22 (南から)



SK24 断面 (南から)



SK24 (南から)



SK25 断面 (南から)



SK225 (南から)



SK26 (南から)



SK28 (南から)

3区



SK27 断面 (南から)



SK27 (南から)



SE01 断面 (西から)



SE01 (西から)



西壁



調査風景



面精査状況



調査状況



空中写真 (東上空から)



全景写真 (南から)



全景 (北から)



北半全景 (東から)



北上空から

4区



南上空から



西上空から



東上空から



林谷遺跡上空から東側福崎方面

4区



垂直写真



調査前 (北から)



調査前 (北から)



調査準備 (草刈り)



機械掘削



北壁



北壁



調査風景



SK01 断面 (南から)

4区



SK01 内ビット (南から)



SK01 (南から)



SP04 土器出土状態



SP04 全掘 (東から)



SP05 断面 (北から)



調査風景



SK02 断面 (東から)



SK02 (東から)



SK02 (北東から)



SK02 (南から)



SK03 アゼ (南から)



SK03 (南から)



全景 (南から)

4区



全景 (北から)



SX01 アゼ (南から)



SX01 (東から)



SX01 (南から)



SX01 (北から)



調査風景



SX01 と SK01 の切り合い (南から)



SX02 アゼ (南から)



SX02 (南から)



SX02 と SH01 (南から)



SX01 と SH01 (東から)



調査風景



SH01 アゼ (南から)



SH01 竈出土状況 (北から)



SH01 土器 (炭・焼土) 出土状態



SH01 土器出土状况



SH01 と SX01・SX02 (南東から)



SH01 と SX01・SX02 (南東から)



調査風景



調査風景



SH01 床面焼土・炭検出状況



SH01 床面焼土・炭検出状況



SH01 床面焼土・炭検出状況



SH01 床面焼土・炭検出状況

4区



SH01 内 P3 断面 (南から)



SH01 南壁沿い土器出土状態



SH01 竈



SH01 焼土面 (中央炉跡)



SH01 全景 (東から)



SH01 全景 (北から)



SH01 (西から)



SH01P3



SH01P4 土器出土状況



SH01P4 (南から)

4区



SH01 北肩部土器出土状態



SH01 北肩部土器出土状態



SH01 北肩部土器出土状態



SH01 北肩部土器出土状態



SH01 竈検出状況



SH01 竈検出状況



SH01 竈断面 (東から)



SH01 竈 (東から)



SH01 竈 (南から)



SH01 竈 (南から)



SH01 竈 (北から)



SH01 竈調査風景



SH01 中央炉断割り



SH01 南炉断割り



SD01 (北から)



SD01 (西から)

4区



SB01 (東から)



SB01P1 断面 (南から)



SB01P4 断面 (南から)



SB01P5 断面 (南から)



SB01P8 断面 (南から)



SB01 垂直写真



SB02 垂直写真



SB02 (南から)



SB03P17 断面 (北から)



SB03 垂直写真



SB03P18 断面 (北から)



SB03P68 断面 (北から)



SB03P70 断面 (西から)



調査風景

4区



SB04 (西から)



SB05 (西から)



SB04・SB05 (南から)



SB04P26 断面 (南東から)



SP10 断面 (西から)



SP10 (南から)



SA01・SA02 (東から)



埋戻し



西半全景（南上空から）



東半全景（東上空から）

5区



調査前（北東から）



北東部垂直写真



調査風景



北東部鋤溝



北東部鋤溝（西から）



北東部鋤溝（西から）



北東部鋤溝（東から）



東壁ビット



東壁北半



東壁南半



北壁焼土坑



東上空から



調査風景



南壁東半



南東部調査風景



南東部旧河道弥生土器出土状態

5区



南東部焼土検出状況（南から）



調査風景



焼土断割り（北から）



南東部焼土検出状況（南から）



炭検出状況（南から）



南東部耕作痕（北から）



東半上面全景（南から）



東半上面全景（北から）



東半上面垂直写真



西上空から



北上空から



東上空から



南上空から

5区



東半上面 P2 (南から)



東半上面 P7 (南から)



東半上面 P2 断割り (南から)



東半上面 P7 断割り (南から)



SA03 (南西から)



東半上面 P7 底 (西から)



SB06 (南から)



SB06 P1 断割り (南から)



SB06 P2 断割り (南から)



SB06 P3 断割り (南から)



東半上面 P4 (南から)



SB06 P3 底 (南から)



P4 土器出土状態 (南から)



東半上面 P4 柱痕跡 (南から)



調査風景



調査風景

5区



SH02 検出状況 (南から)



SH02 壁溝7ㄴ (南から)



SH02 検出状況 (南から)



SH02 南東炭化材・壁溝 (南から)



SH02 焼土・炭検出状況 (西から)



SH03 焼土・炭検出状況 (南から)



SH02 垂直写真



SH02 甕出土状態



SH02 (南から)



SH02 調査風景



SH02 (西から)



SH02 土坑 1 (東から)



SH02 土坑 1 (南から)



SH02 土坑 1 (西から)



SH02 土坑 1 断割り (南から)



SH02 土坑 3 アゼ (南から)

5区



SH02 北西柱穴



SH03 (南から)



SH04 検出状況 (南から)



SH04 アゼ (北東から)



SH04 土器出土状況 (南から)



SH04 土器出土状況 (南から)





SH04 土坑 1 断面



SH04 土坑 2 断面 (南から)



SH04 (南から)



SH04 (西から)



SH04 土坑 2 (南から)



SH04 炉跡土器出土状態 (北から)



SH04 焼土坑 (南から)



SH04 焼土坑断面 (南から)

5区



SH04 炉跡断割り (南から)



SH04 炉跡調査風景



SH05 アゼ (東から)



SH05 土坑1断面 (南から)



SH05 (東から)



SH05 (南から)



SH05 (北から)



SH05 炭化材 (南から)



SH06 (南から)



SH06 (西から)



SH06 (南東から)



SH06 (北から)



SH06 北炉跡断面 (南から)



SH06 北炉跡 (南から)



SH06 北炉跡 (西から)



SH06 北炉跡 (北から)

5区



SH06 北炉跡断割り (南から)



調査風景



SH06 南北炉跡 (北から)



SH06 南北炉跡 (西から)



SH06 南炉跡上部堆積状況



SH06 南炉跡検出状況 (南から)



SH06 南炉跡断面 (西から)



SH06 南炉跡 (西から)



SH06 南炉跡 (南から)



SH06 南北炉跡 (東から)



SH06 北突出部 (南から)



SH06P5 土器出土状態 (南から)



SH06P6 (南から)



調査風景



シート養生



ドローン撮影風景

5区



SB07 調査風景 (東から)



SB07 (東から)



SB07 (西から)



SB07 (南から)



SB07 垂直写真



調査風景



SB07P1 断割り (南から)



SB07P2 断割り (南から)



SB07P3 断割り (南から)



SB07P4 断割り (南から)



SB07P5 断割り (西から)



SB07P6 断割り (北から)



SB07P7 断割り (南から)



SB07P8 断割り (南から)



SB07P9 断割り (北から)



SB07P10 断割り (南から)

5区



SB07P11 調査風景



SB07P11 断割り (北から)



SB07P12 断割り (東から)



調査風景



SB08 (南から)



SB08・09 (西から)



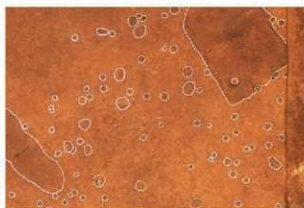
SB08P48 断割り (南から)



SB08P53 断割り (南から)



SB08・09 垂直写真



SB11・12 垂直写真



SB13 垂直写真



SB11・12 (北から)



P61 (南から)



SB12P62 (南から)



SB12P63 (南から)



調査風景

5区



SX03 アゼ (南西から)



SX03' (南西から)



SX04 断面 (北西から)



SR027ㇿ (南から)



SR037ㇿ (南から)



SR01 土師器出土状態



SR01 底 (南壁)



東半下層全景（南から）



東半下層全景（北から）



東半下層垂直写真



全景（西上空から）



全景（北上空から）

5区



全景（南上空から）



全景（東上空から）



西半全景（南から）



西半全景（北から）



西半垂直写真

















報告書抄録

ふりがな	はやしだにいせき
書名	林谷遺跡
副書名	高岡・福田地区ほ場整備事業に伴う調査報告書
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	31
編著者名	渡辺 昇
編集機関	福岡町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福岡町南田原 3116-1 TEL : 0790-22-0560
発行年月日	2024年 3月 10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査 種別
		市町村	遺跡番号					
林谷遺跡	兵庫県神崎郡 福岡町高岡 字宮ノ上 字辻ケー	28443	410049	34度 58分 11秒	134度 44分 17秒	2019年 7月1日～ 11月7日 (36日間) 2021年 7月19日～ 9月23日 (36日間)	2,560 1,540	ほ場 整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林谷遺跡	集落跡	縄文 古墳 奈良	落とし穴 竪穴住居 掘立柱建物 鍛冶炉	須恵器・土師器 須恵器・土師器	

2024年3月10日発行

福崎町埋蔵文化財調査報告 31

林谷遺跡

—高岡・福田地区は場整備事業に伴う発掘調査報告書—

発行 福崎町教育委員会

〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1

印刷 山野印刷株式会社